

E709.2
Kc49
(8)6

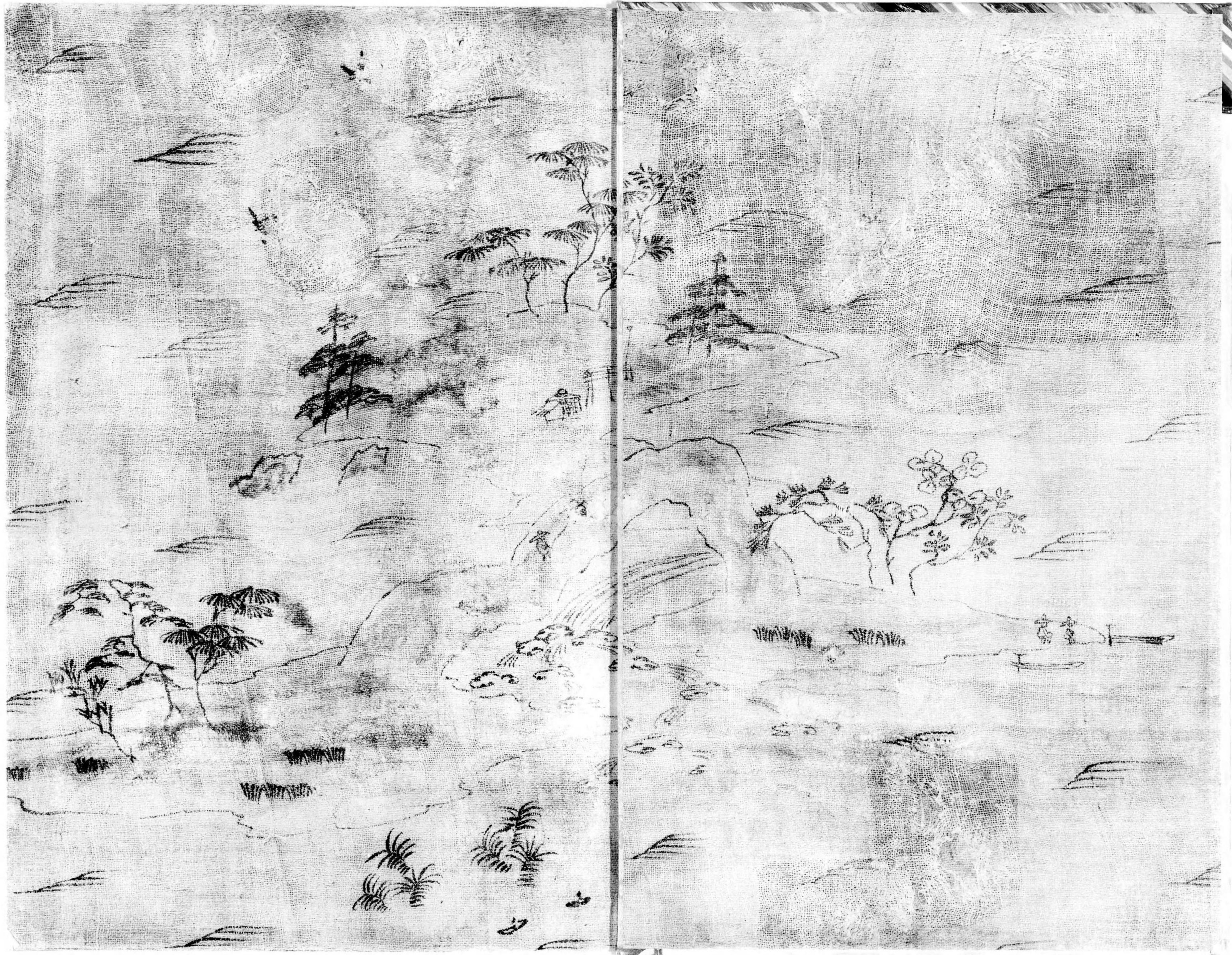
秩
入

正倉院御物目録
八

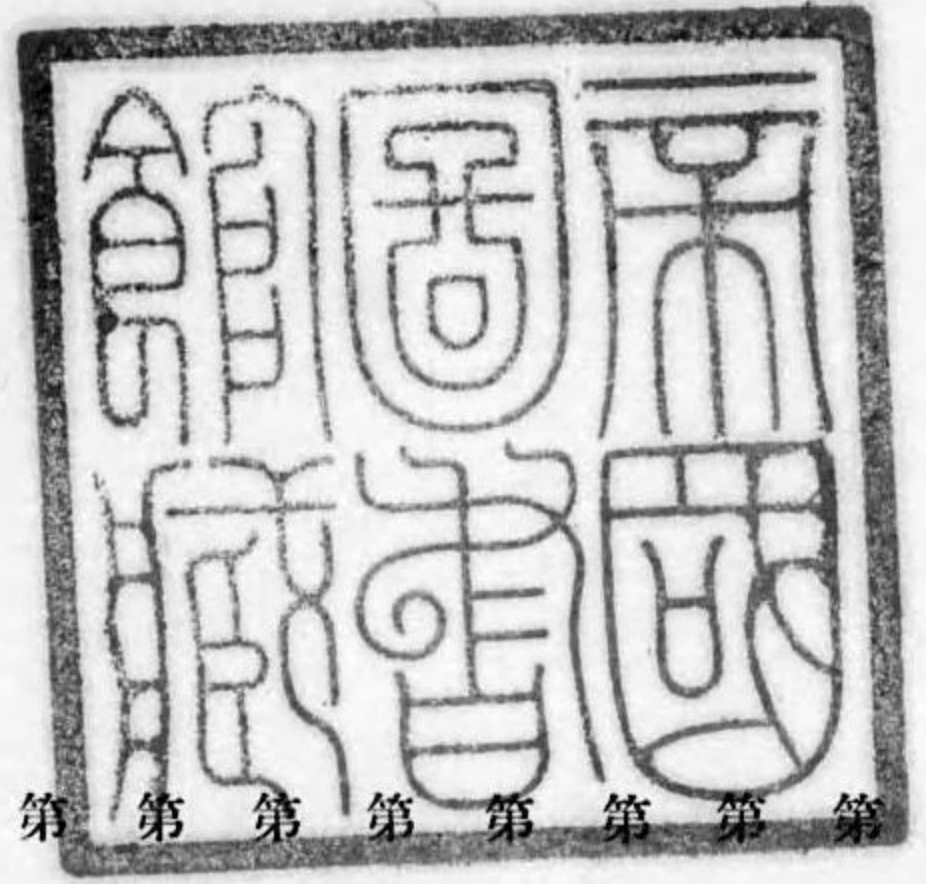
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





ETOB 709.2
 SH 96
 (8) K049
 (8)



正倉院御物圖錄 第八輯

中倉納物

目次

第十四圖	第十三圖	第十二圖	第十一圖	第十圖	第九圖	第八圖	第七圖	第六圖	第五圖	第四圖	第三圖	第二圖	第一圖
紫檀金銀繪雙六筒	同	同	紫檀木畫雙六局	金銀繪漆合子	漆合子	金銀繪合子	桑木畫合子	桑木畫合子	同	彈弓	同	漆繪彈弓	同
	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二



第十五圖 木畫螺鈿雙六局 (一)
 第十六圖 沈香木畫雙六局 (一)
 第十七圖 同 (一)
 第十八圖 漆胡樽二合 (一)
 第十九圖 同 (一)
 第二十圖 漆挾子二枚 (上) (一)
 第二十一圖 白純裏鎮子二枚 (下) (一)
 木 笏
 魚 骨
 黃 熟
 黑柿兩面厨子 (一)
 同 (一)
 柿厨子 (一)
 同 (一)
 白葛筥三合の一 (一)
 同 (一)
 白葛筥三合の二 (一)
 白葛筥三合の三 (一)
 斑蘭筥蓋 (一)
 同 (一)
 第三十二圖 (一)

第三十三圖 柳箱 (一)
 同 (一)
 第三十四圖 漆皮箱二合の一 (上) (一)
 同 (下) (一)
 第三十五圖 金銀平脱漆皮箱二合の一 (一)
 同 (一)
 第三十六圖 同 (一)
 第三十七圖 同 (一)
 第三十八圖 金銀平脱漆皮箱二合の二 (一)
 同 (一)
 第三十九圖 密陀繪漆皮箱 (一)
 第四十圖 同 (一)
 第四十一圖 同 (一)
 第四十二圖 同 (一)
 第四十三圖 沈香木畫水精莊箱 (一)
 同 (一)
 第四十四圖 同 (一)
 第四十五圖 同 (一)
 第四十六圖 密陀彩繪箱三合の一 (一)
 同 (一)
 第四十七圖 同 (一)
 第四十八圖 密陀彩繪箱三合の二 (一)
 同 (一)
 第四十九圖 同 (一)
 第五十圖 同 (一)

第五十一圖	密陀彩繪箱三合の三	(二)
第五十二圖	同	(二)
第五十三圖	同	(三)
第五十四圖	榎 楠 箱	
第五十五圖	白 檀 八角 箱	
第五十六圖	金 銀 繪 木 理 箱	
第五十七圖	黒柿蘇芳染金銀山水繪箱	
第五十八圖	紫 檀 木 畫 箱	(二)
第五十九圖	同	(二)
第六十圖	紫 檀 箱	
第六十一圖	瑋 瑁 螺 鈿 八角 箱	(二)
第六十二圖	同	(二)
第六十三圖	銀 平 脫 箱 中 蓋	
第六十四圖	四 重 漆 箱	
第六十五圖	漆 箱 四 合 の 一 (上)	
	漆 箱 四 合 の 二 (下)	
	漆 箱 四 合 の 三 (上)	
第六十六圖	漆 箱 四 合 の 四 (下)	

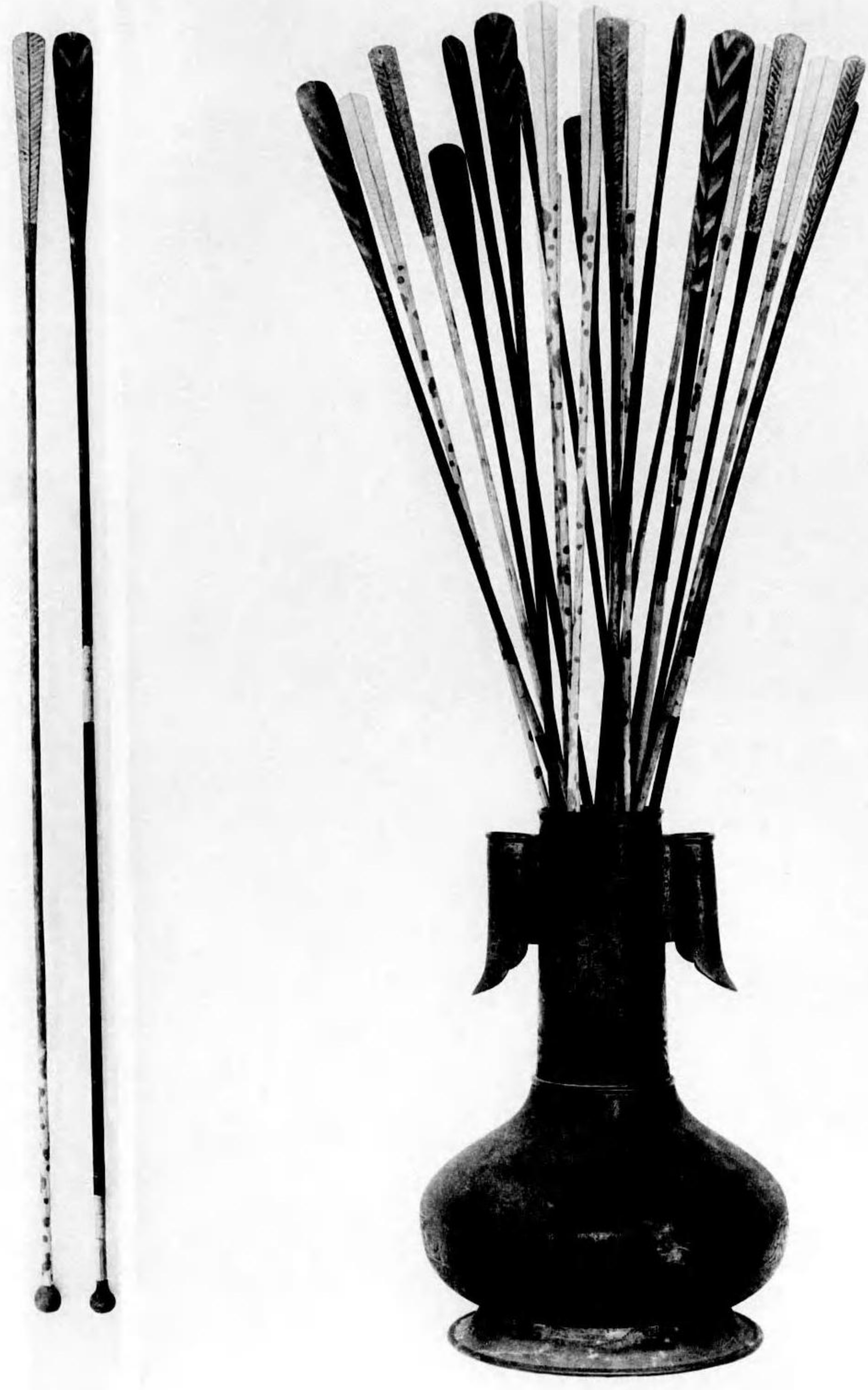
第一圖 投 壺 (一)

壺 口徑七糎四 高三糎 重五斤四七五
 箭 長七糎七

投壺は支那の遊戯具である。壺を中央にして東西相對し、各十二矢をもつて壺に投入して勝負を競ふもので、箭の或は壺耳を貫き、或は壺口に横はり、或は一旦壺に入ったのが激して躍り出る等によつて、それ／＼得點に差異がある云ふ。

壺は金銅製、下膨れの瓶形をなし頸邊に兩耳を作る。兩耳は壺の飾りではなくて投壺必須のもので上下に貫通孔がある。箭は現存總數二十三隻、其の形は殆んど同じであるが、製作上二様の別が見られる。一は木製、牛角綠青塗の箭をつけ、幹に樺を纏き朱芳にて矢羽を描いたもの、他は竹製、朱塗の箭をつけ金泥にて矢羽を描き、幹に黄土を塗り朱土墨で假斑を作つたものである。蓋し競技の場合敵味方識別のためと思はれる。圖版左は其の比較的完全なものを一本づゝ出して箭の全形を示す。

(箭長三分)



茶一圖 壺 (一) 高四寸五分 口径二寸五分 身直徑三寸五分
 此壺は、茶の湯の儀式に用ゐる。其の形は、古くは、土瓶に似てゐるが、此の壺は、より洗練されたものである。口は、やや狭く、身は、丸みを帯びてゐる。この壺は、茶の湯の儀式に用ゐる。其の形は、古くは、土瓶に似てゐるが、此の壺は、より洗練されたものである。口は、やや狭く、身は、丸みを帯びてゐる。

茶一圖 茶杓 (一) 長一尺二寸五分 口径二寸五分 身直徑三寸五分
 此茶杓は、茶の湯の儀式に用ゐる。其の形は、古くは、土瓶に似てゐるが、此の茶杓は、より洗練されたものである。口は、やや狭く、身は、丸みを帯びてゐる。この茶杓は、茶の湯の儀式に用ゐる。其の形は、古くは、土瓶に似てゐるが、此の茶杓は、より洗練されたものである。口は、やや狭く、身は、丸みを帯びてゐる。

第二圖 投 壺 (二)

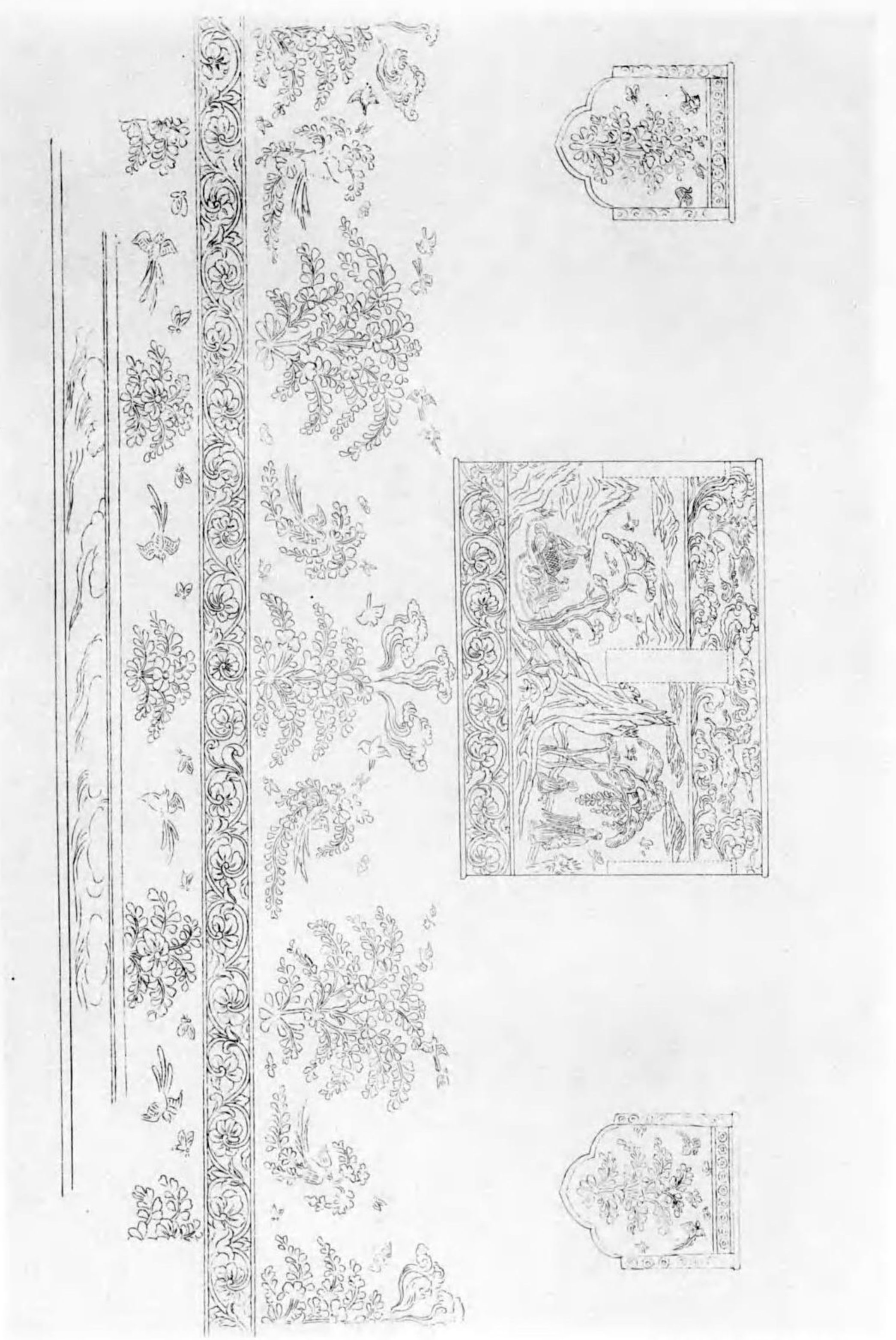
(縮寫五分四)

壺の表面には全體に涉つて線刻の文様を施し、其の間隙には魚子を打つ。文様は壺の頸上部に於いて獅子に雲、頸中部に樹下人物像、耳には花卉飛鳥、胴部には飛雲花卉蝶鳥、香臺には波濤をあらはす。就中頸中部の樹下人物の線刻は、南倉紫檀木畫琵琶の撥面の圖と共に、獻物帳の古人畫屏風の圖様を想見させるものとして特別な關心をひく。

且てそのまゝにして（竹原の園心亭）
 の裏面の園と共に、繪畫の古人畫景の園林の
 餘中園中話の梅道人の園林、南唐畫對木表景
 繪畫の對景畫景、春景の對景畫景、
 繪畫の對景、園中話の梅道人の園林、
 の園林の對景、文對の對景、園中話の梅道人
 の裏面の對景の對景、園中話の對景、
 園中話の對景、園中話の對景、園中話の對景、

第二圖 繪 畫 (二)

（續前頁）



投 交 繪 畫 用 圖



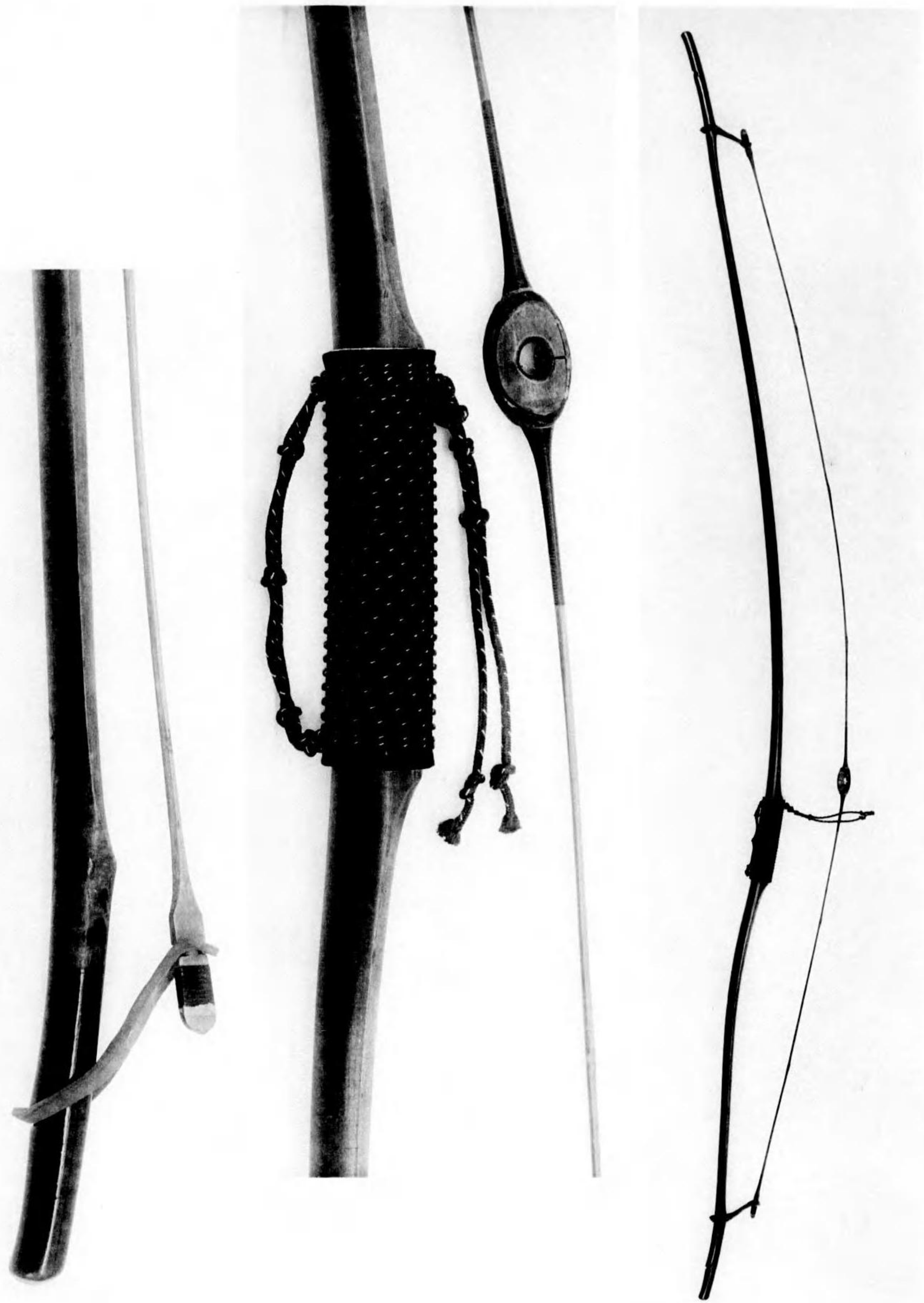
第三圖 漆繪彈弓(一)

(全形縮寫五分ノ一、部分原寸)

全長一六二種

遊戯具の一つで弦に小丸たまごをもち弾き興するものと云ふ。弓身は梓の白木造りで、兩弭には葉狀に黒漆を塗り、把には白革を内にして紫革を纏き更に雜色組緒を飾る。又弓身の弦に對する面には多數の人物像を描く。弦は竹製で、其の兩端と中央の丸座まるざの部分とは特に構纏かまを施し、且つ之が弭への連接には丹塗の牛皮を用ふ。

圖版右端は弓の全形、中は把、左は本弭の部分をあらはす。



同前注諸石の全等、中お引、及び本體の輪やさきより引す。
 箭は引射の中矢を引す。
 中央の球體の輪やさきお引の輪を引す、且つ之を引へるを
 提する箇にお引を引の輪を引す。引の付置、其の引射と
 引の付置、其の引射を引の輪を引す。又引射の引の
 引射の引の付置、引射の引射を引す。引射の引の
 引射の引の付置、引射の引射を引す。引射の引の

全長一丈二寸

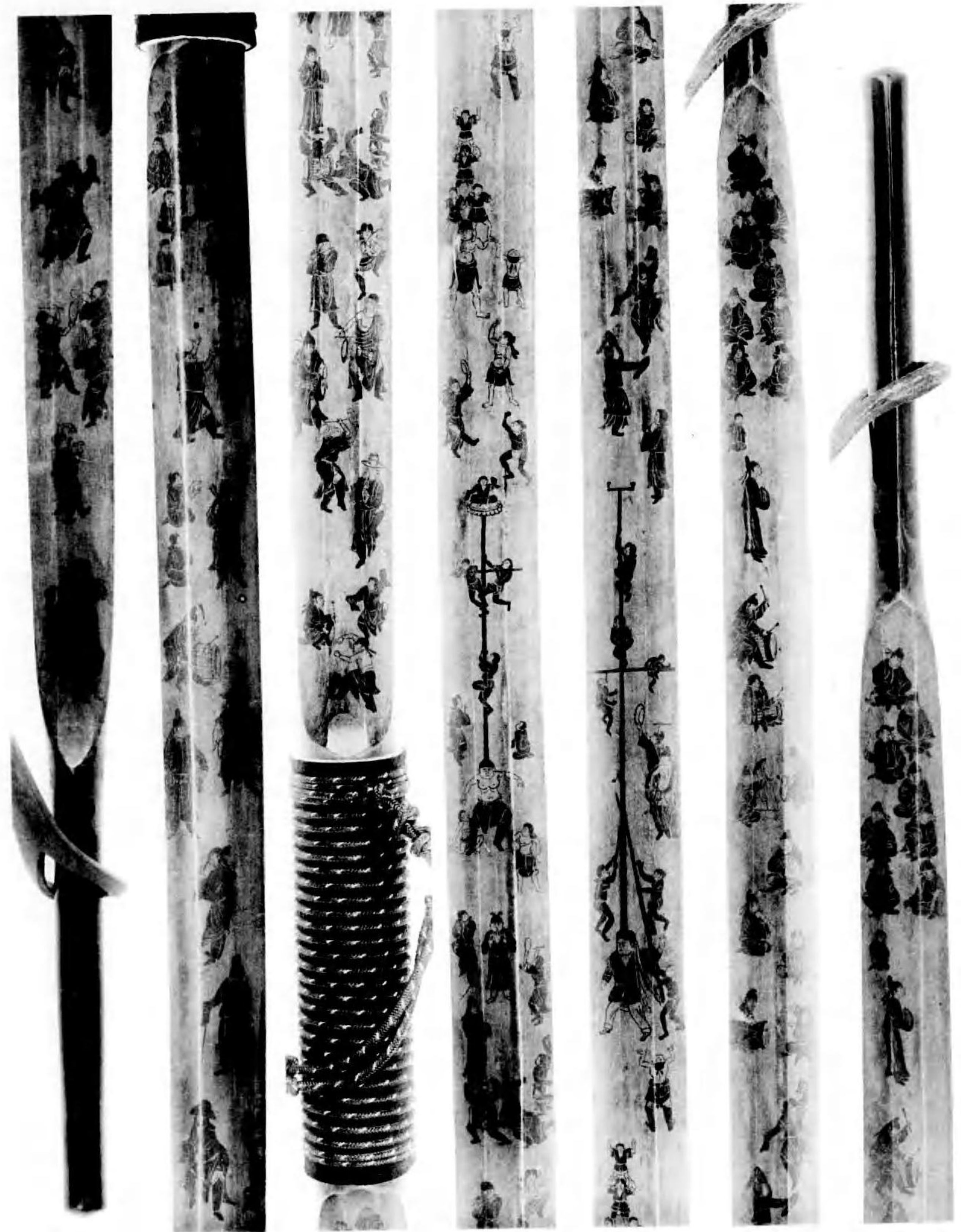
第三圖 箭 箭 弓 (一)

（右の圖は、左の圖の）

第四圖 漆繪彈弓(二)

(原寸)

弓身内面の墨繪人物全部をあらはす。圖版の都合上、原物通りの一連として掲載する事の出来ないのは遺憾だが、其の重複するところを斟酌すれば、構圖の全體は先づ想像出來やう。描かれた人物は把より上に六十七人、把より下に二十九人、合計九十六人、老幼男女、或は冠或は帽、裸形もあれば赤靴もあり、大鼓腰鼓篋篋琵琶尺八横笛鉦子笙銅鑼等々を奏し、これに合わせて舞ひ輕業し、又手鞠を弄ぶ等千姿萬態、往古の人情風俗の察せられて、興味甚だ深きものがある。



卷之三 雜錄之二 十一

此卷之末，有雜錄之二，其內容多為零碎之文，然亦足以見其人之博學多聞。其文多為對偶句，且多有典故，其詞藻亦極其華麗。此卷之末，有雜錄之二，其內容多為零碎之文，然亦足以見其人之博學多聞。其文多為對偶句，且多有典故，其詞藻亦極其華麗。

第五圖 彈 弓

長一七二釐

(全形縮寫五分之二、部分原寸)

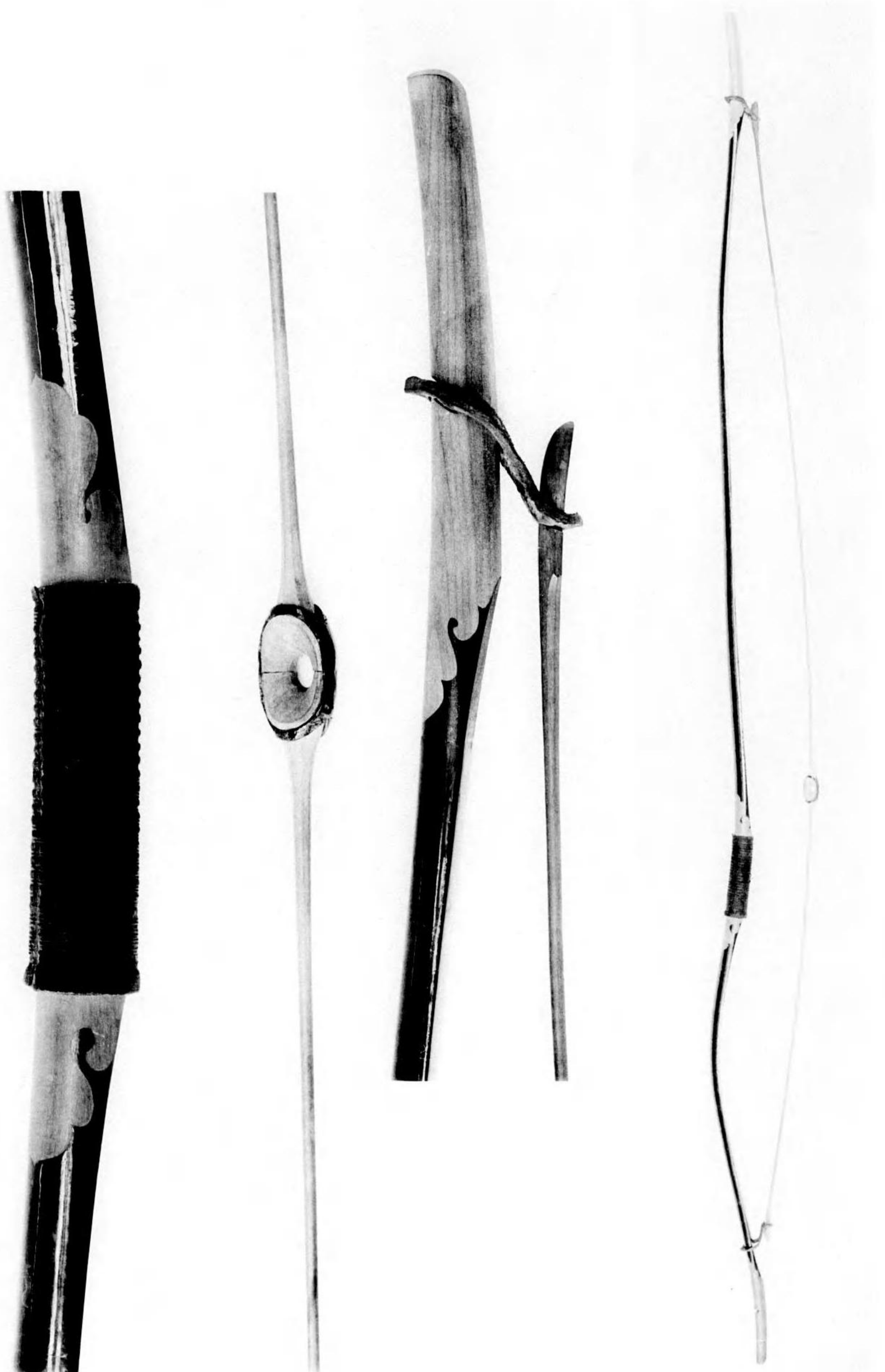
弓身の材が梓である許りでなく、其の形も前掲漆繪彈弓と全く同じと云つてよいが、弓身の裝飾に於いて、これは兩弭と把とを榿木のまゝに残し、其の弦に對する面を赤漆に、他を黒漆に塗つてゐる。

此の図は、
日本刀の
種類を
示すものである。
各々の
特徴を
説明する。
其の
種類は
古流、
新流、
無類、
等がある。
其の
中でも
最も
有名なのは
古流である。
其の
特徴は
、

第一ノ類

端正圖解

(この図は、日本刀の
種類を示すものである。)



第六圖 桑木木蓋基局螺銀鍍牙擦鏡粧(一)

(縮三分一)

一邊長五二釐 高二五釐五

盤は藤芳染一枚板の臺に桑の
小口切板を張り、白牙の界線を
嵌入して作られ、香狹間の透し
ある紫檀の床脚を附す。床脚に
は金泥にて木理を描き、又盤の
側面には木蓋を作りその間に擦
鏡の文様ある象牙並螺銀を飾る。

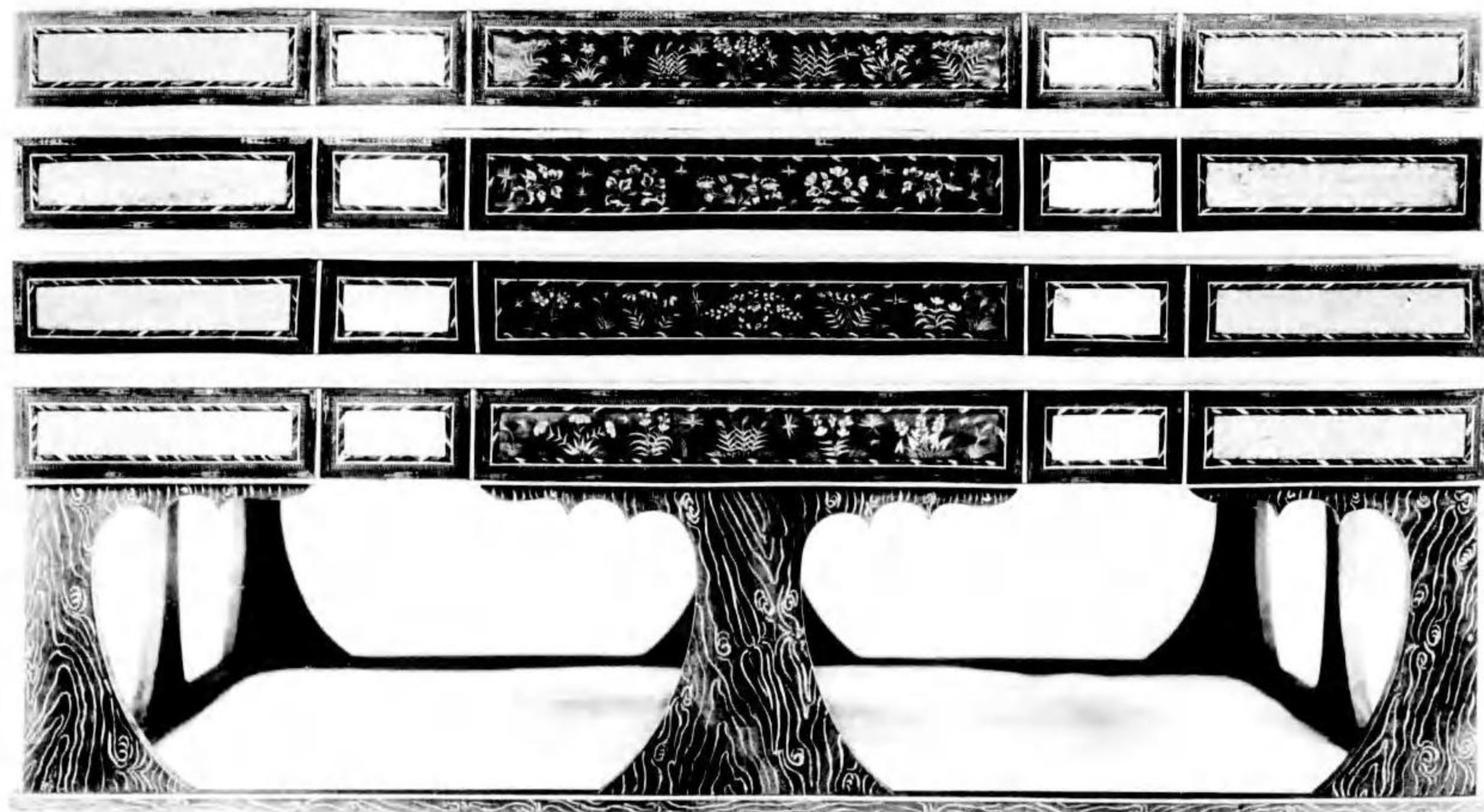
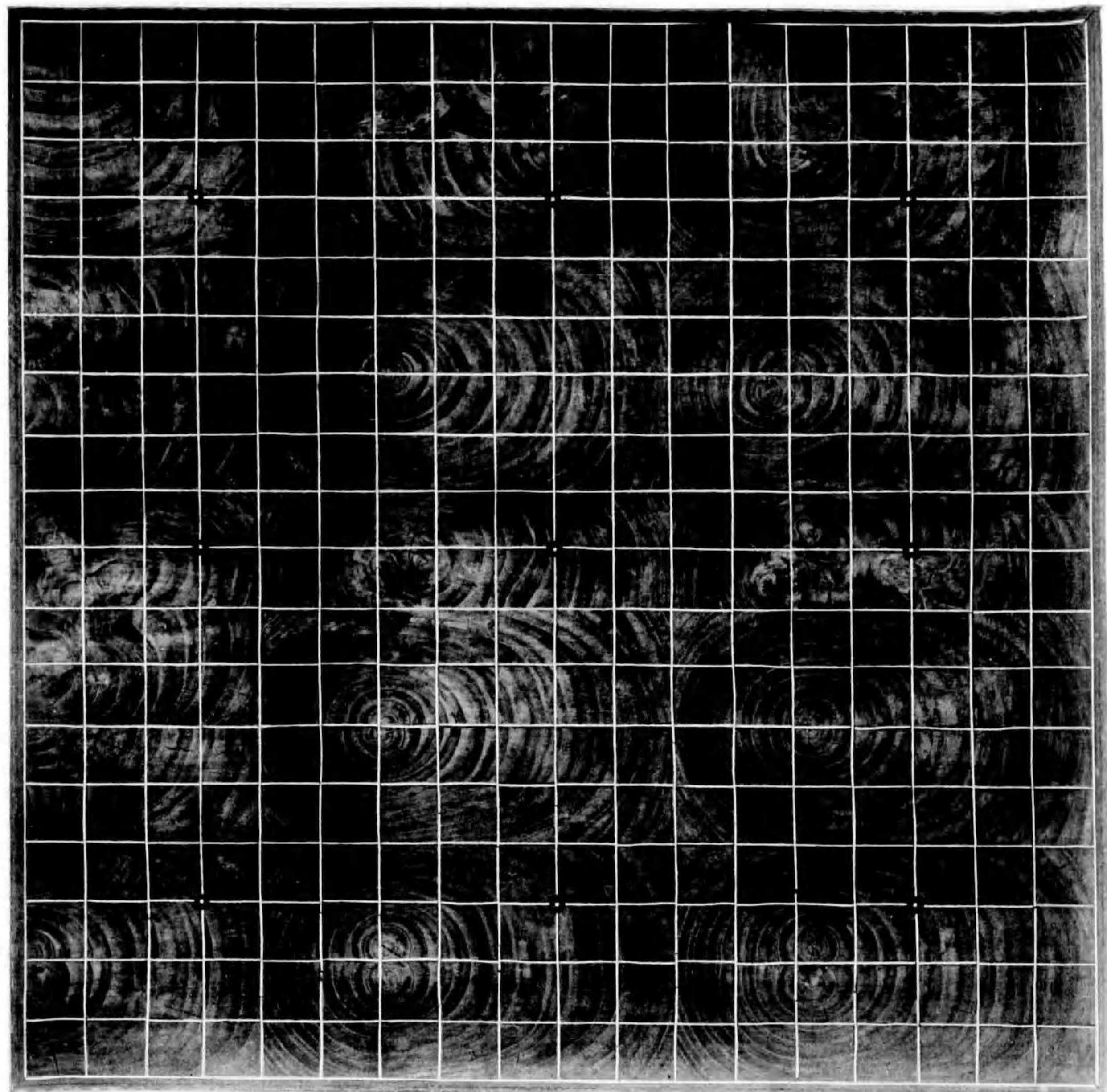
第七圖 桑木木畫棋局 螺鈿黃紺牙撥鏤莊(二)

(縮寫七分三)

前掲棋局の盤面と側面とを出す。盤面に配された花眼は九箇で北倉木畫紫檀棋局の十七箇に比べて八箇少いが、今の棋盤のそれと一致する事は興味深い。因に花眼の心は白牙、瓣は紫檀、界線は純金で作られてゐる。

盤側面の撥鏤は中央紺牙、其兩側は白螺、兩端は黃牙よりなるが、文様は變化に富み、同じものを反復してはゐない。

此の事は撥鏤を廻ぐる矢羽形木畫の方向の必ずしも一定しないのと相待つて技巧の自由さを思はせる。



Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is faint and difficult to read, but appears to be organized into several lines or paragraphs.

第八圖 桑木木畫基局 (繪影分二)

一邊長五種 高一五種一

盤面に桑の小口切板を張り、縁と側面とに木畫を嵌め、柴檀の床脚をつけ、香狹間を透し、鹿角で飾る等前掲基局と甚だよく似てゐる。只彼と異るは盤面花眼の四辨白牙裂なると側面螺鈿紺黃牙擦鍍莊の代りに單に濃淡ある柴檀を配し又脚に殊更金泥木理を作らなかつたこと位である。前者の垂懸には及ばぬが、それだけ實用的である。

第九圖 金銀繪基子合子二合

圖 寸

各徑九釐四 高五釐

杉材の埴物、白木地の合子で、其の上と側面に金銀泥で唐花蝶鳥の文様を圖してゐる。一
夏の製作殆んど同じと云つてよいが、其の文様に於いて、一方鳥を銀とすれば他方は金、一方花心を金にすれば他方は銀と云つた風に、相反する色調に於いて描かれてゐるのは注意を要する。蓋し基子の黒白に準せしめ

たものであらう。



此盒之蓋面與底面均飾有菊花及飛鳥之圖案，其內面亦飾有菊花及飛鳥之圖案。此盒之蓋面與底面均飾有菊花及飛鳥之圖案，其內面亦飾有菊花及飛鳥之圖案。此盒之蓋面與底面均飾有菊花及飛鳥之圖案，其內面亦飾有菊花及飛鳥之圖案。

此盒之蓋面與底面均飾有菊花及飛鳥之圖案，其內面亦飾有菊花及飛鳥之圖案。

第十圖 漆合子二合上 (前四分三)

徑二五種 高七種四

徑二六種三 高六種二

木心布張黒漆塗の合子である。直ちに

に非筒と斷するわけにはゆかぬが、類

をもつてこゝに收む。

金銀繪漆合子下 (前五分)

蓋徑一〇種 高二種五

身は後桶、蓋だけが舊物。木心布張

黒漆塗で、上面中央には金泥で鳳凰を

描き、それを繞つて銀泥の瑞雲を配す。

又側面にも金銀の草花文をあらはす。

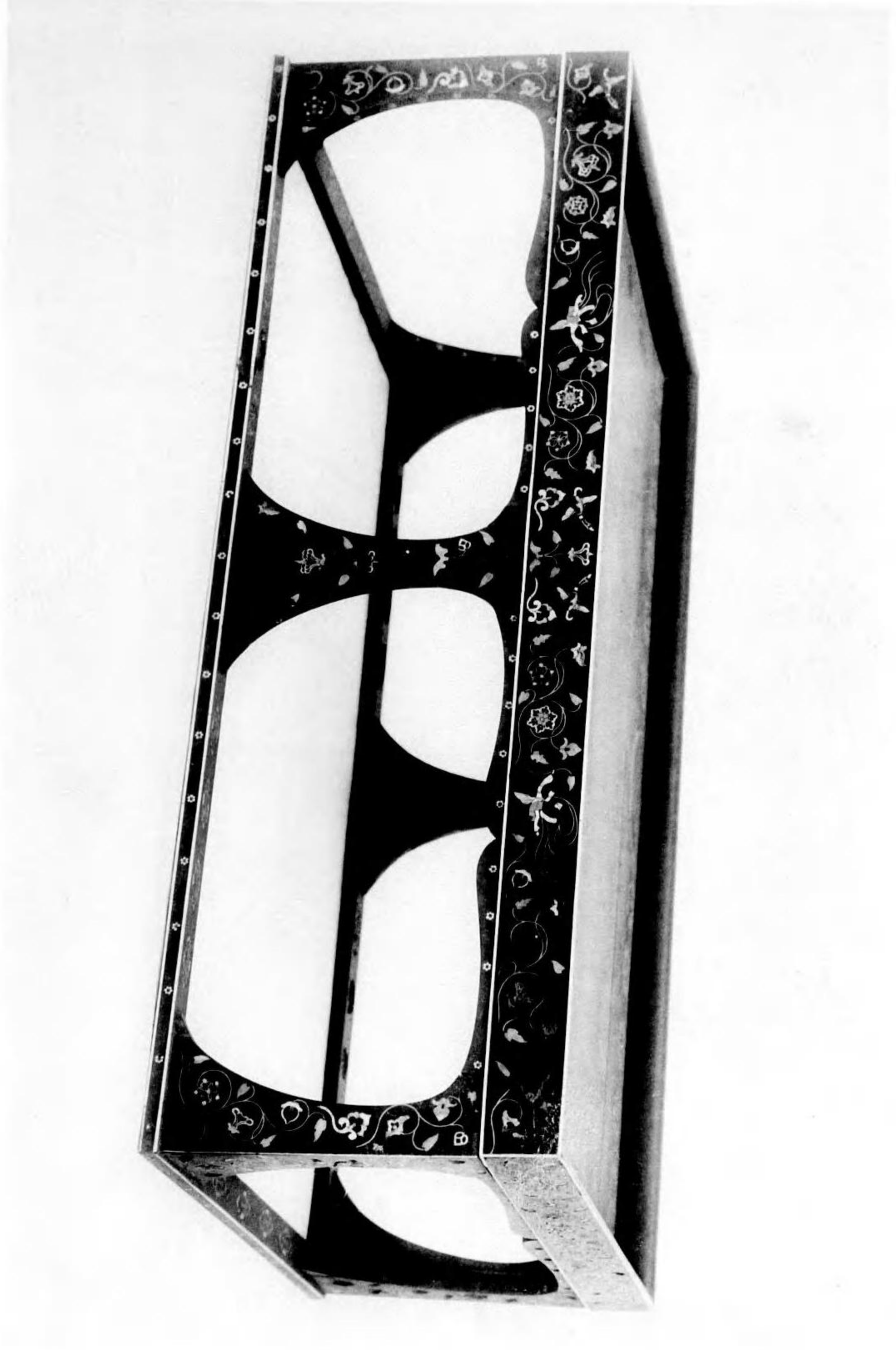


Text on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The text is faint and mostly illegible due to the high contrast of the scan. It appears to be organized into several lines, possibly representing a list or a series of entries.

第十一圖 紫檀木書雙六局(一)

(繪者 野分三)

堅三疊六 横五四疊五 高一八寸
全部紫檀材にて作られ、之に
精巧な木莖を施したもので、雙
六局中優秀のものである。盤の
周圍に立ち上りの縁があり、床
脚に香狭間を透すは後世の雙六
盤と甚だ異なる。



第一、其二、其三、
 第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第一百。

第三十卷 第六册 第四页 第一八行

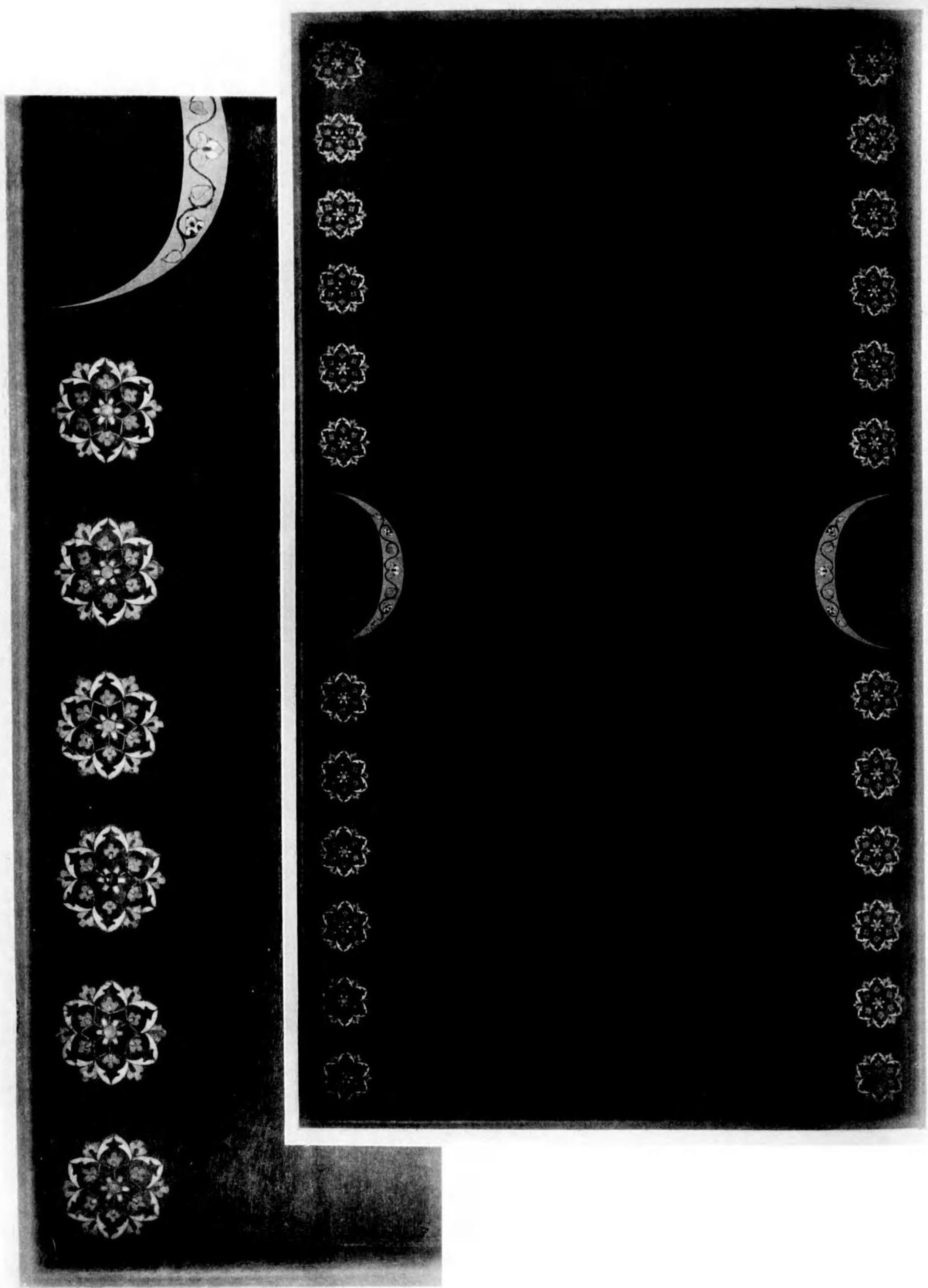
（此处有模糊文字）

第十一回 张翠大闹天宫（二）

前掲雙六局の盤面を示す。中
央三ヶ月形の雙側に各六個づつ
の花形を本盤するは配石の位置
を示すもので、雙六の名は蓋し
これより出づと云はれてゐる。
下圖は特に本盤の部分原寸
にて表はす。

第十二圖 碁盤本畫雙六局(二)

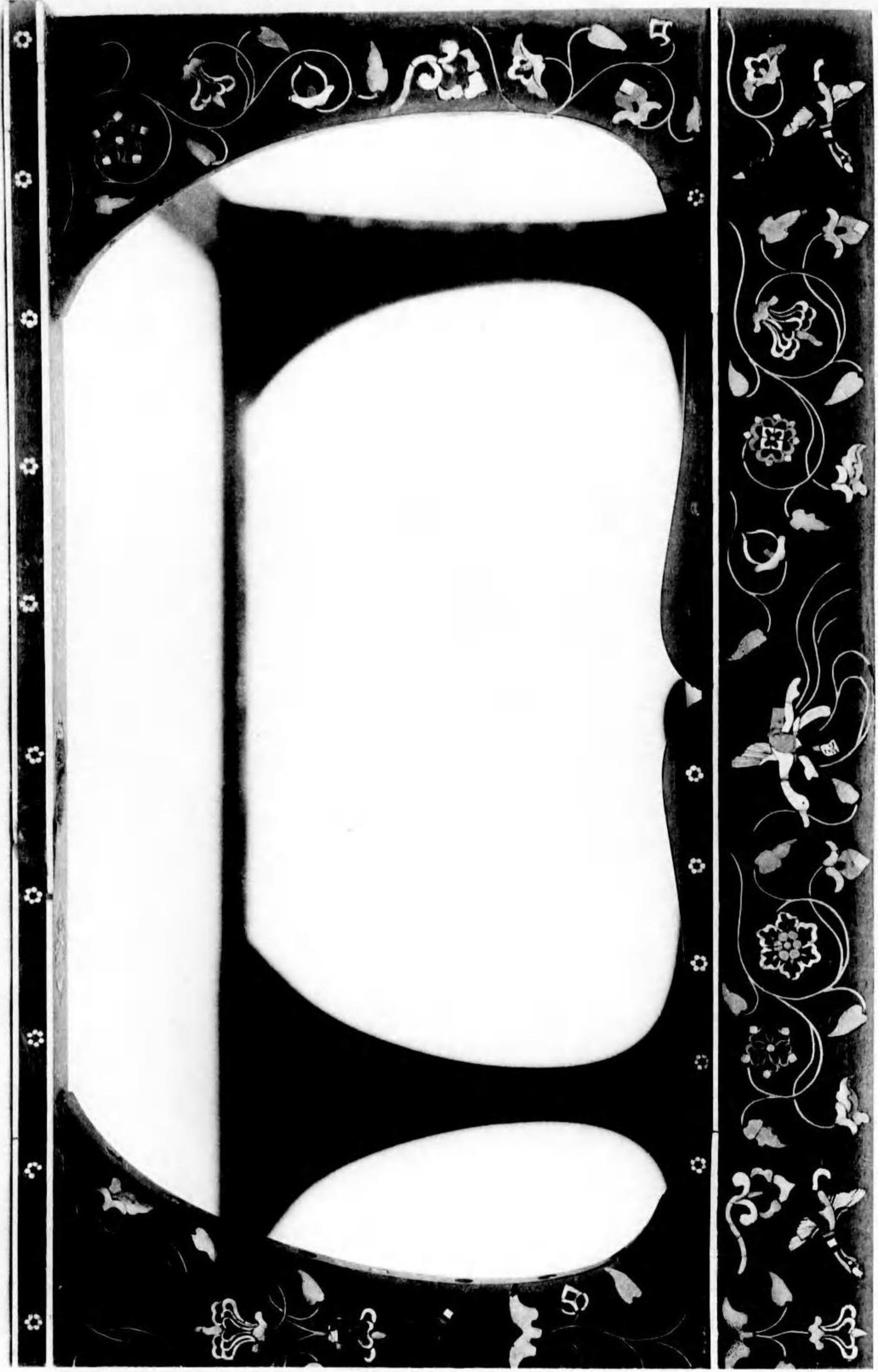
(續三分一、下頁)



The right page of the book is mostly blank, with some faint, illegible markings or bleed-through from the reverse side. The text is too light to be transcribed accurately.

側面の部分を原寸にて示す。
其の處々に見える剝落の痕は、
以つて木葺製作の工程を察する
に足る。こゝに用ひられてゐる
木葺の材料には黄楊木紫檀鐵刀
木水牛角縁角白牙等がある。上
方左隅を飛ぶ鳥の腹部の斑駁は
竹の小口切を用ひたものである。

第十三圖 紫檀木葺雙六局(三)



昔已承身仙堂用切其心
各文致其致其致其致其
注本身有餘其其其其其
亦體其其其其其其其其
口且其其其其其其其其
以心其其其其其其其其
其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其

第十七回 蘇州府...

第十四圖 櫃 雙 六 局

〔編纂者分〕三
堅 九 種 横 八 種 高 一 六 種 二

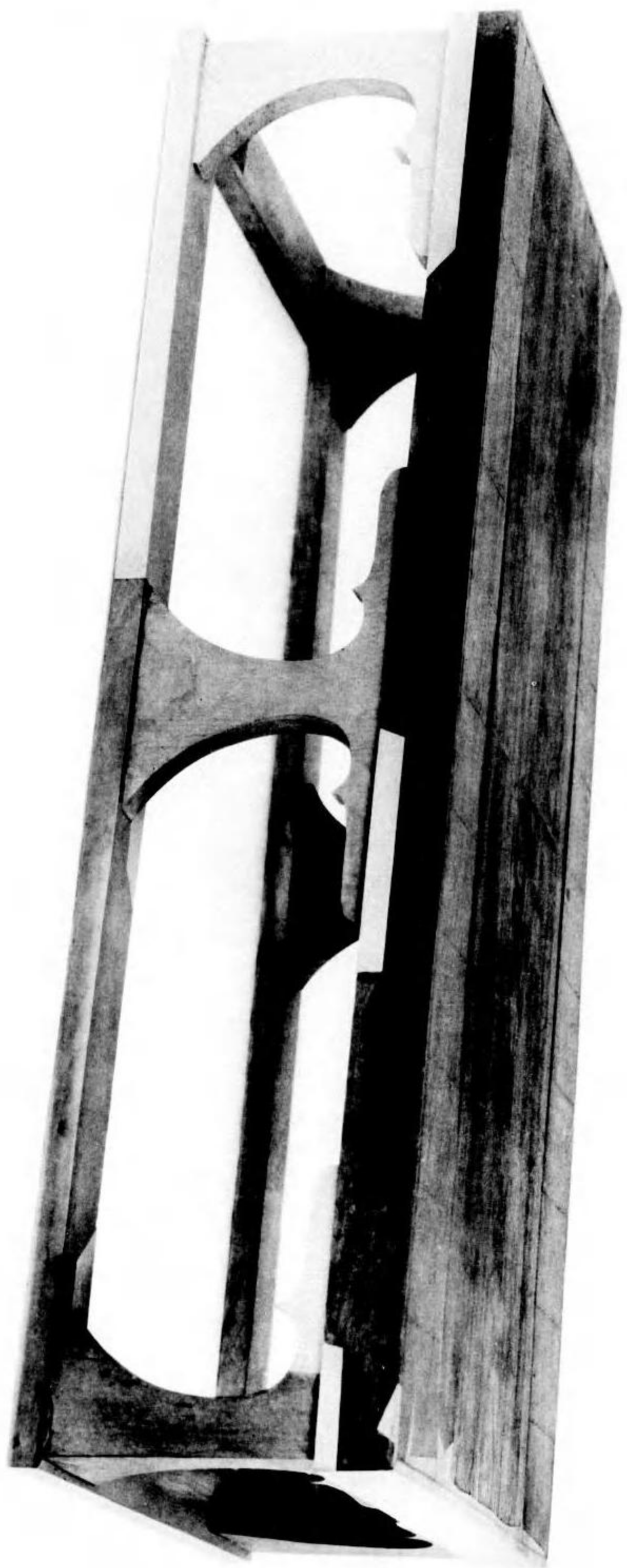
三枚の板を接ぎ合せて盤となし、香
寮間の透しある床脚を着く、盤の面は
は前掲紫檀木葦雙六局に見る様な花形
の徽は無いが、恰も其の位置に當つて
紫檀の界線を嵌め左右六個づゝの坪を
作る。

紫檀金銀繪雙六筒

〔圖 〕
す

口徑三種 二 高八種五

雙六の骰子を入れて振り出す具であ
る。筒は軸廻りの列物で、材は紫檀
其の側面には金銀泥で花卉蝶の文様を
圖し、又口縁と底部とには銀製金具を
つく。因に、此雙六筒ほどの雙六盤に
附屬するものか明かでない。



例題三十二 木製の箱
この箱は、明治の初期に作られたもので、
材は、堅木で、表面は、黒く塗られている。
箱の正面には、二つの大きな、曲線的な開口があり、
これは、箱を開けるためのハンドルとして機能している。
箱の内部には、いくつかの仕切りがあり、
これは、箱に収納された物品を整理するために使われている。

例題三十三 木製の手鏡

例題三十四 木製の箱

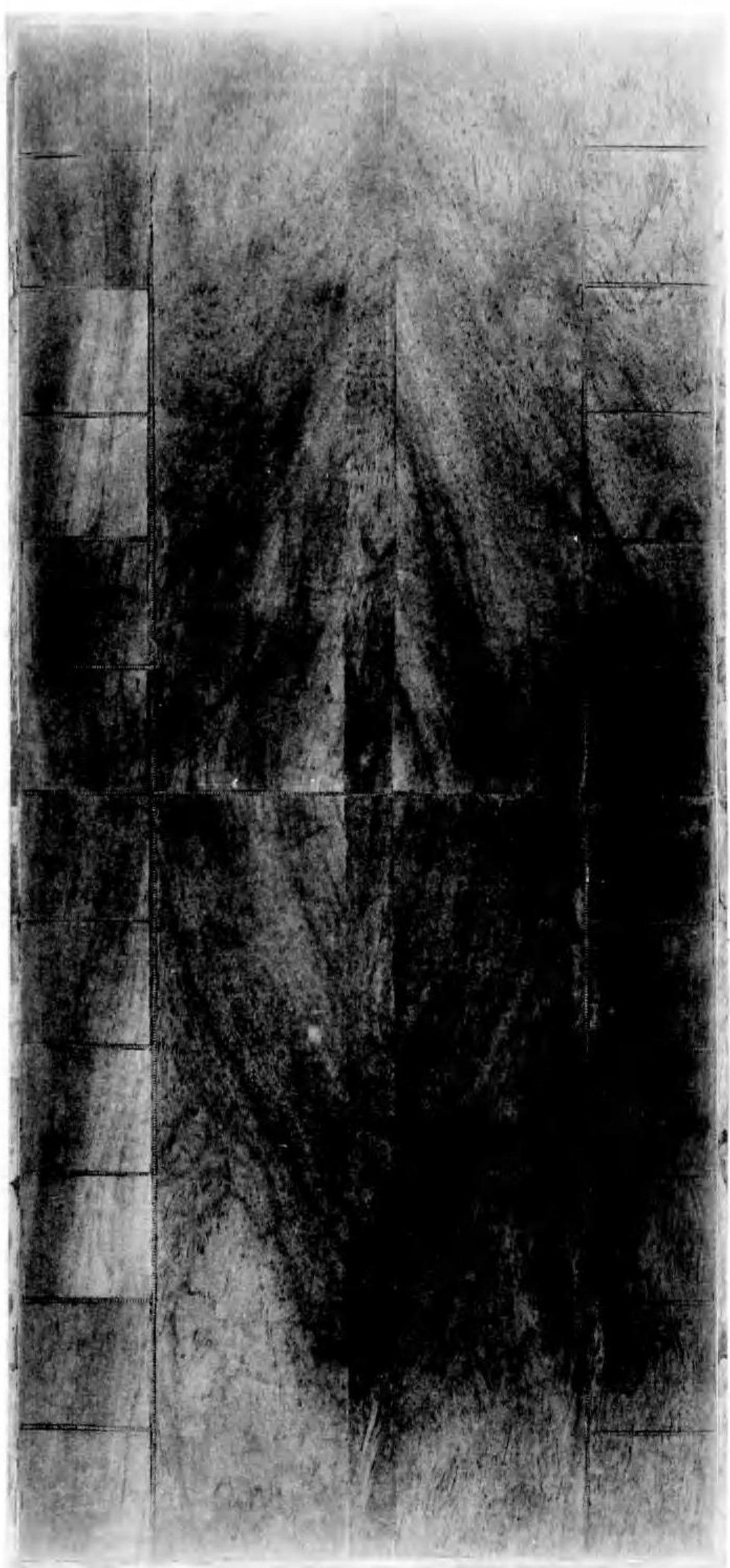
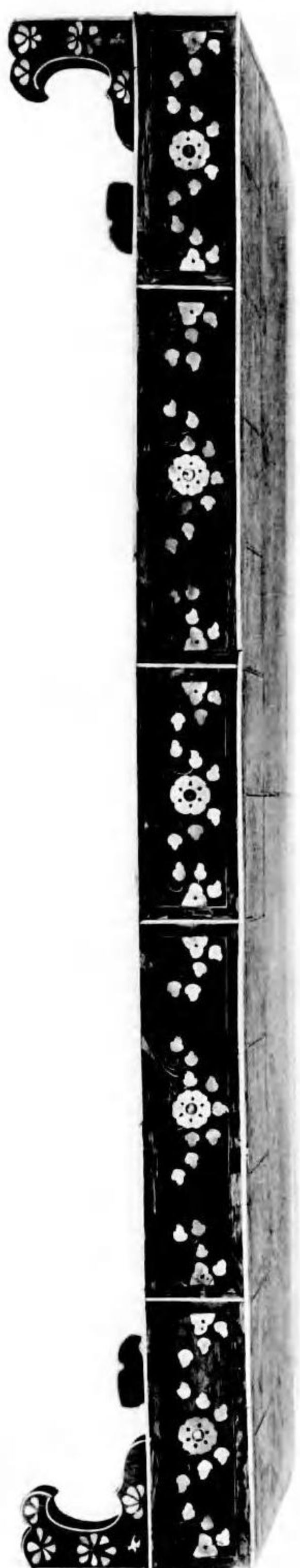
例題三十五 木製の箱
この箱は、明治の初期に作られたもので、
材は、堅木で、表面は、黒く塗られている。
箱の正面には、二つの大きな、曲線的な開口があり、
これは、箱を開けるためのハンドルとして機能している。
箱の内部には、いくつかの仕切りがあり、
これは、箱に収納された物品を整理するために使われている。

例題三十六 木製の箱

例題三十七 木製の箱

第十五圖 木書螺鈿雙六局 （圖分三）
堅三種 横七種 高一種

盤面の區劃は前の推雙六局と
甚だよく似てゐるが、其の斷面
に於いて中央の特に隆起すると
ころから雙六局にあらず彈棊盤
であらうとの説もある。盤は柿
材の臺に紫楨を張り、上面に木
蓋の界線、側面と脚部に螺鈿の
花文を作る。



明倫彙編
家範典
卷一百一十五
婦人
一、婦人之道，上承宗廟，下繼嗣續，其於家也，猶若木之有根，水之有源。故曰：家之有婦，猶若國之有母。母之於子，猶若水之於魚。魚無水則死，子無母則孤。故婦人之道，不可不慎也。

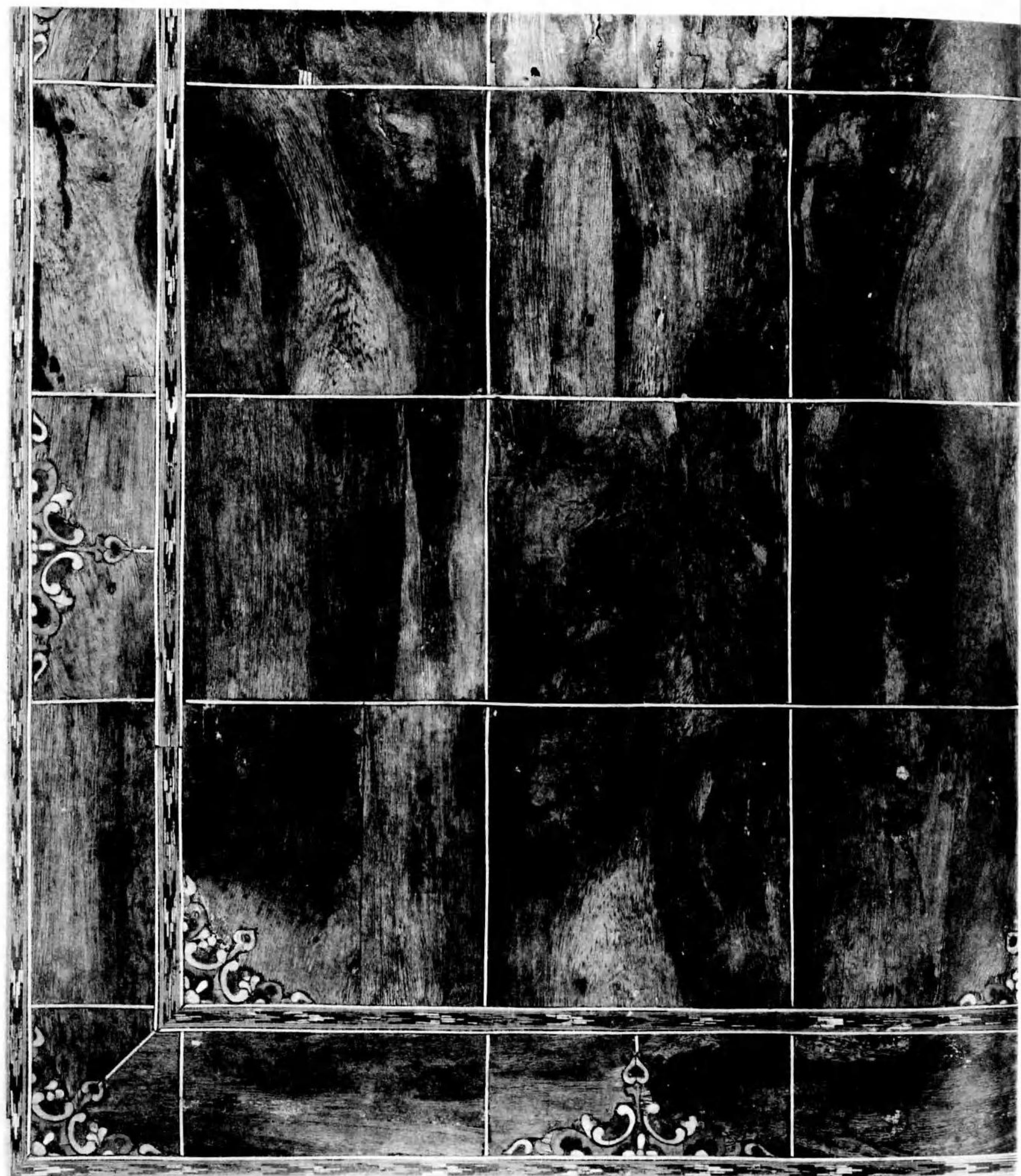
第十六圖 沈香木畫雙六局(一)

繪影粉五分三

堅二九種 楯四三種 七總高七種三

盤面は木畫の界線によつて先づ内區
外區に大別せられ、更に白牙の界線に
よつて内區を十五區外區を二十四區に
分ち、其の各區には沈香を嵌めところ
へんに木畫の寒文を覗かせる。區劃の
體裁は前掲雙六局の何れとも異り、果
して雙六局かどうか甚だ疑問である。
床脚は黒柿製で香狹間の透を作るが
新補の部分が多い。

第十七圖 沈香木蓋雙六局(二)
局 せ
前掲局面の部分である。こゝ
の木蓋の材料は紫檀・黄楊・木白牙
縁牙等が用ひられてゐる。



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

第十八圖 漆 胡 樽 二 合 (一)

各長九二種 重四斤一八五瓦

(縮寫四分一)

二合は形に於いて正反對をなすが、何れも割合に軽い木で胴を作り布を張り黒漆をかけ、各二個の環を着け、其の製作は兩者全く同様である。此の器の確かな使途に就いては未だ詳で無いが、其の形と製作とから察するに二合一具とし左右相對せしめて用ひたものであらう。

斜面と口の部分を示す。口は
長径一〇釐、短径七釐五の楕圓
形をなすが、帯のところに至つ
て約せられて径二釐五の孔とな
り、それより奥は又次第に廣が
つてゐる様である。金具は兩者
とも鐵製黒漆繪、鏝は其の断面
不正六角形をなし、六花形の座
に堅く動かぬ様に取っつけられ
てゐる。

(右厚、左釐分ノ四)

第十九圖 漆胡樽 (二)



琴瑟
 一、琴瑟之制，其法不一，然其聲則一也。
 二、琴瑟之材，其質不一，然其性則一也。
 三、琴瑟之聲，其韻不一，然其德則一也。
 四、琴瑟之德，其功不一，然其化則一也。
 五、琴瑟之化，其功不一，然其德則一也。
 六、琴瑟之德，其功不一，然其化則一也。
 七、琴瑟之化，其功不一，然其德則一也。
 八、琴瑟之德，其功不一，然其化則一也。
 九、琴瑟之化，其功不一，然其德則一也。
 十、琴瑟之德，其功不一，然其化則一也。

琴瑟圖說

第二十圖 漆 挾

軾 (上)

(縮寫約四分ノ一)

高一米 幅二四釐六 高三〇釐八

大きさ形も北倉の紫檀木畫挾軾に甚だよく似てゐるが、彼の裝飾的であるに對し、これは甲板も脚も黒の一角に漆塗して極く實用的である。甲板の兩端を直線に切らず蒲鉾形にしてあるのや、脚床の角を圓くしてゐる事も實用には前者より便利であらう。

白絶裏鎮子 二枚 (下)

(縮寫三分ノ一)

長各六九釐三

木製の心材を綿で裏み、其の上から白絶を以つて覆つたものである。

第二十一圖 木

笏

(縮寫三分一)

長三六種 幅上部四種五 下部五種一 厚上部一種四五 下部一種七

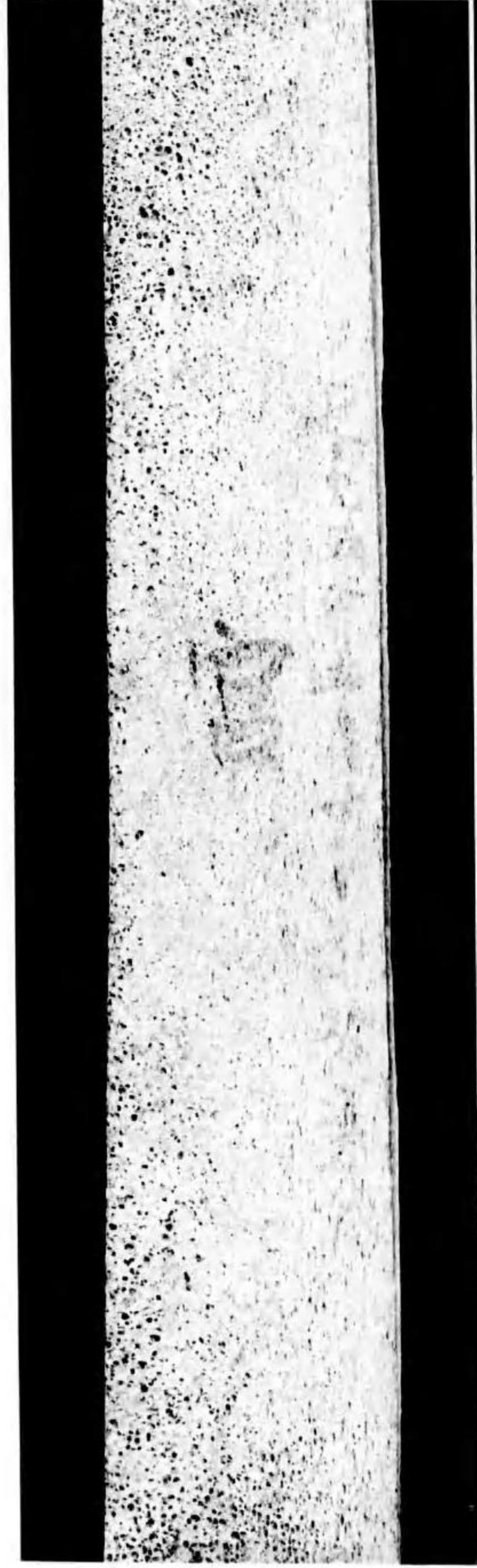
木製には相違無いが、朽ちて質が脆くなつてゐる爲、其の何材であるかは詳にし難い。檜といふ説も楸といふ説もある。

魚 骨 笏

(縮寫三分一)

長三六種 幅上部四種二 下部四種八 厚上部一種四五 下部一種四五

魚骨は鯨の骨と云はれてゐる。一方の面には原寸にあらはした如く「宮」「延喜五年五月廿日□□□□」の墨書がある。



第十卷
目錄
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

第二十二圖 黃 熟 香

全長一米五六釐 重一兩六〇〇瓦

(縮寫約六分ノ一)

一に蘭奢待の稱ある有名な香木である。一見樟又櫟材の朽
腐した様な脆質に見え、色も大體黒褐色を呈するが、其の切
断面は尙灰白色をなして質も甚だ堅緻である。材の心部は朽
腐して大きな洞を作り、延びてそれは枝の部分に及んだとこ
ろもある。

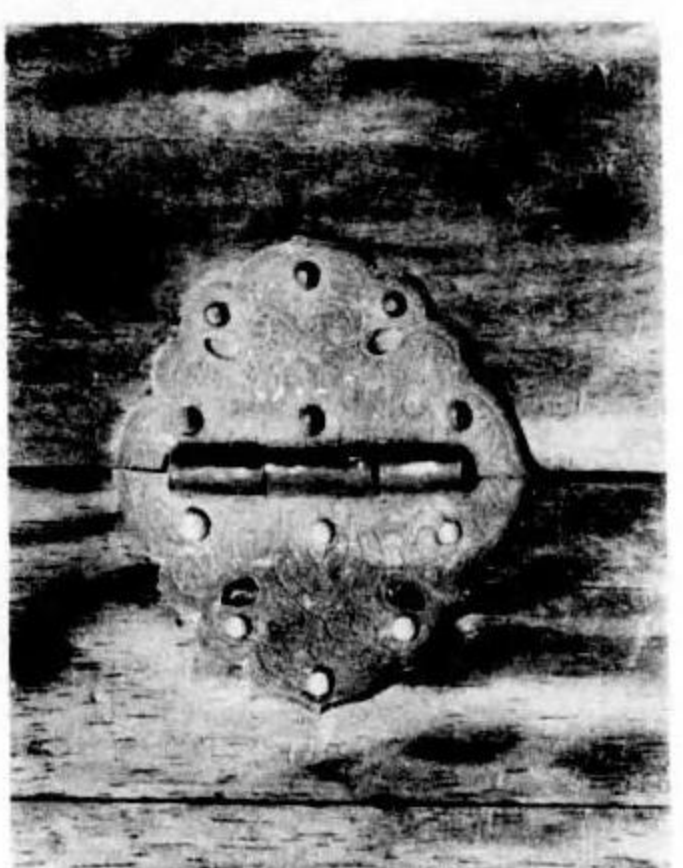
此の香木は嘗て一部を載り取つて足利義政に賜り、後織田
信長にも賜つた事があり、近くは明治天皇奈良行幸の砌依勅
裁断せしめられてゐる。

一圖版上は香材の全形と附屬の二小片、下は元部の洞のこ
ろを寫す。



图十

一、...
二、...
三、...
四、...
五、...
六、...
七、...
八、...
九、...
十、...

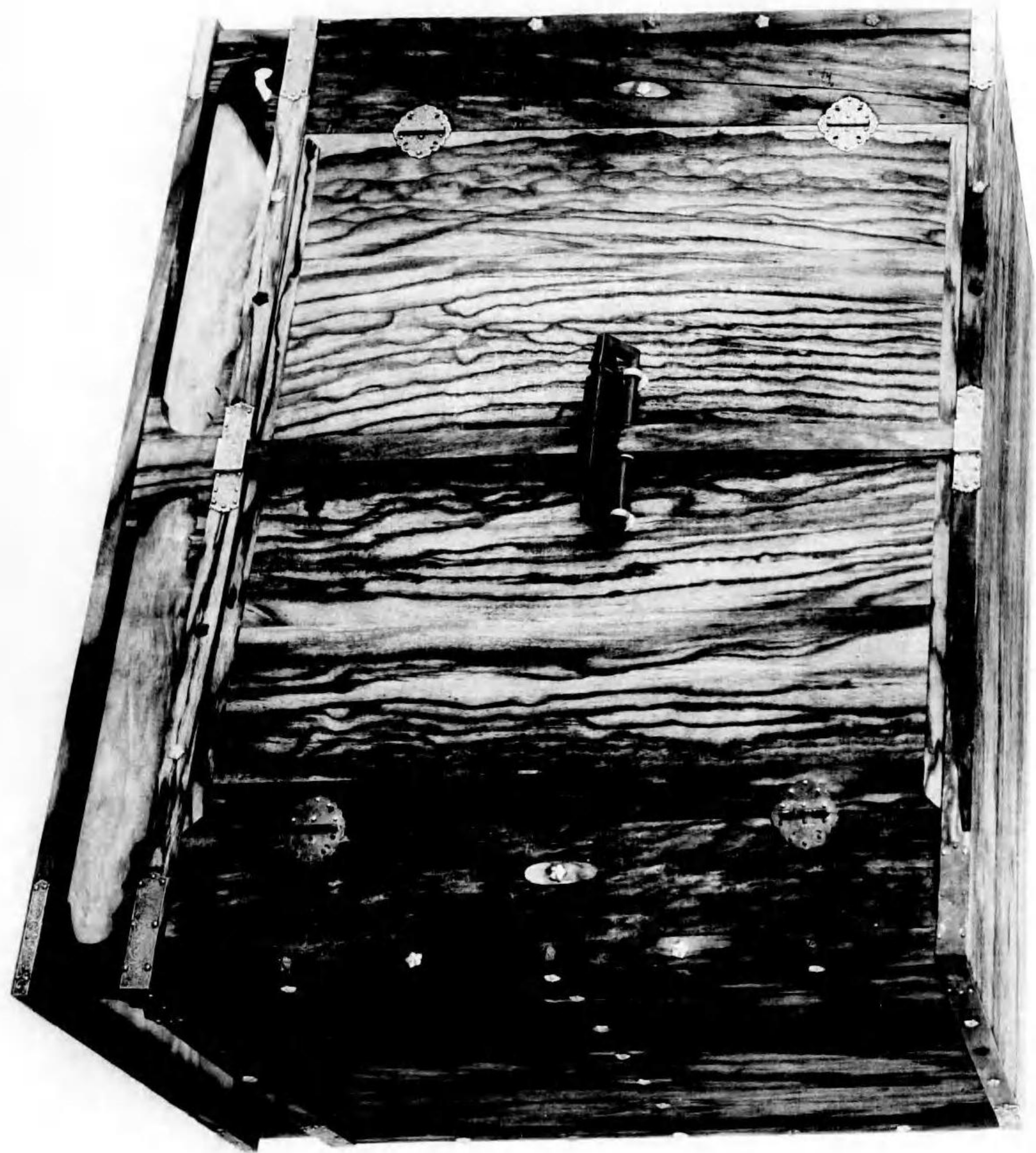


(付圖) 具金銅金

表背両面に扉を設け、中に一段の棚を釣る。材は全部黒柿、金具は皆金銅製だが、共に新補の部分が多相多い。圖版で扉や框の木理鮮かな部分並に金具の白く光つてゐるところは何れも新補の箇所である。

總寫五種 幅六五種五 奥行三四種五

第二十三圖 黒柿兩面厨子(一) (繪寫分二)

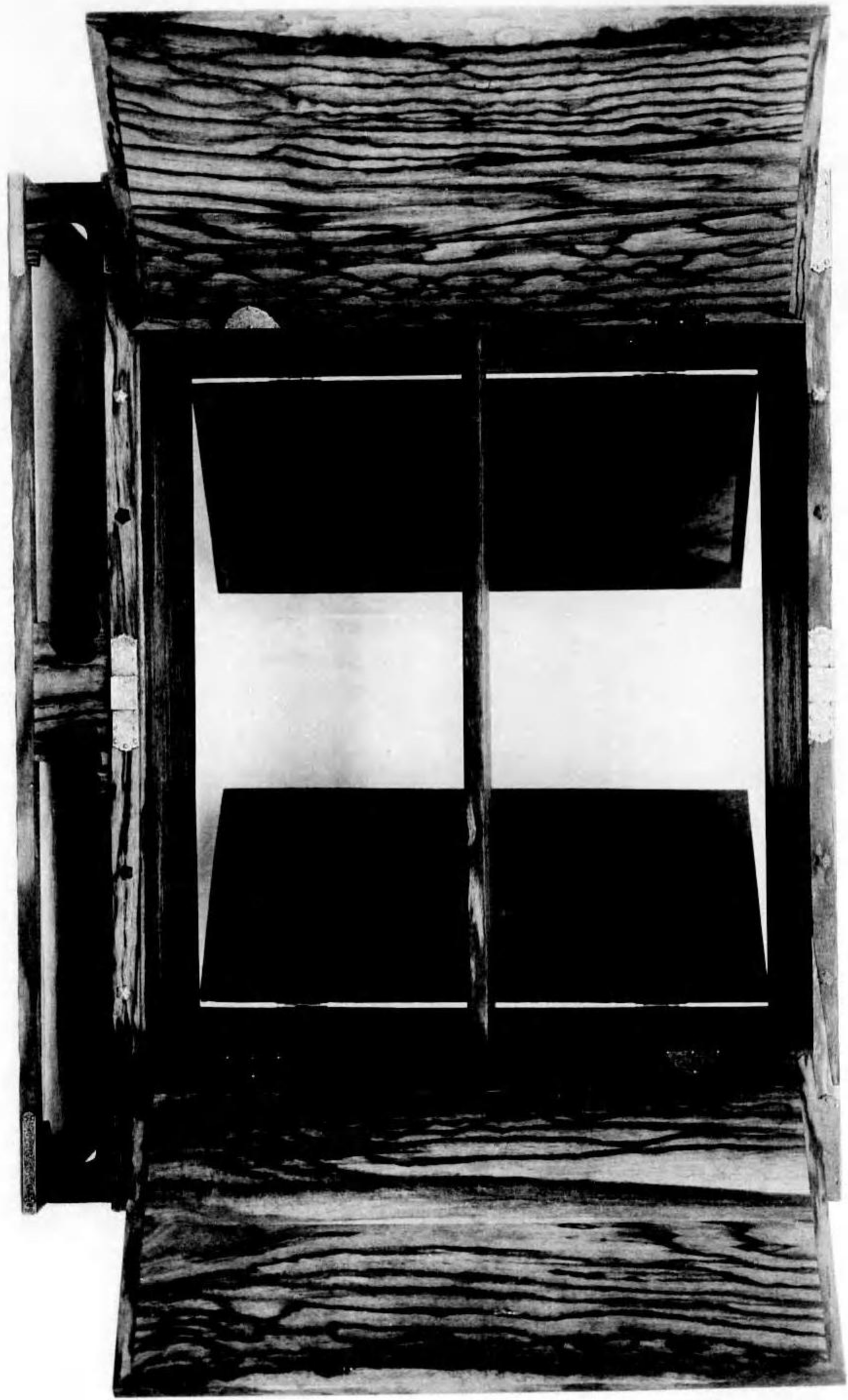


Faint, illegible text or markings, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

扉を開放したところを示す。
棚は正しく其の中央に釣られ、
又底板と天井板とは各僅かば
かりの突出しを造つて扉のひつ
かゝりに當てゝゐる。蝶番金具
は扉の表面だけでも事たるが、
これには扉裏にも同形の金具が
貼されてある。

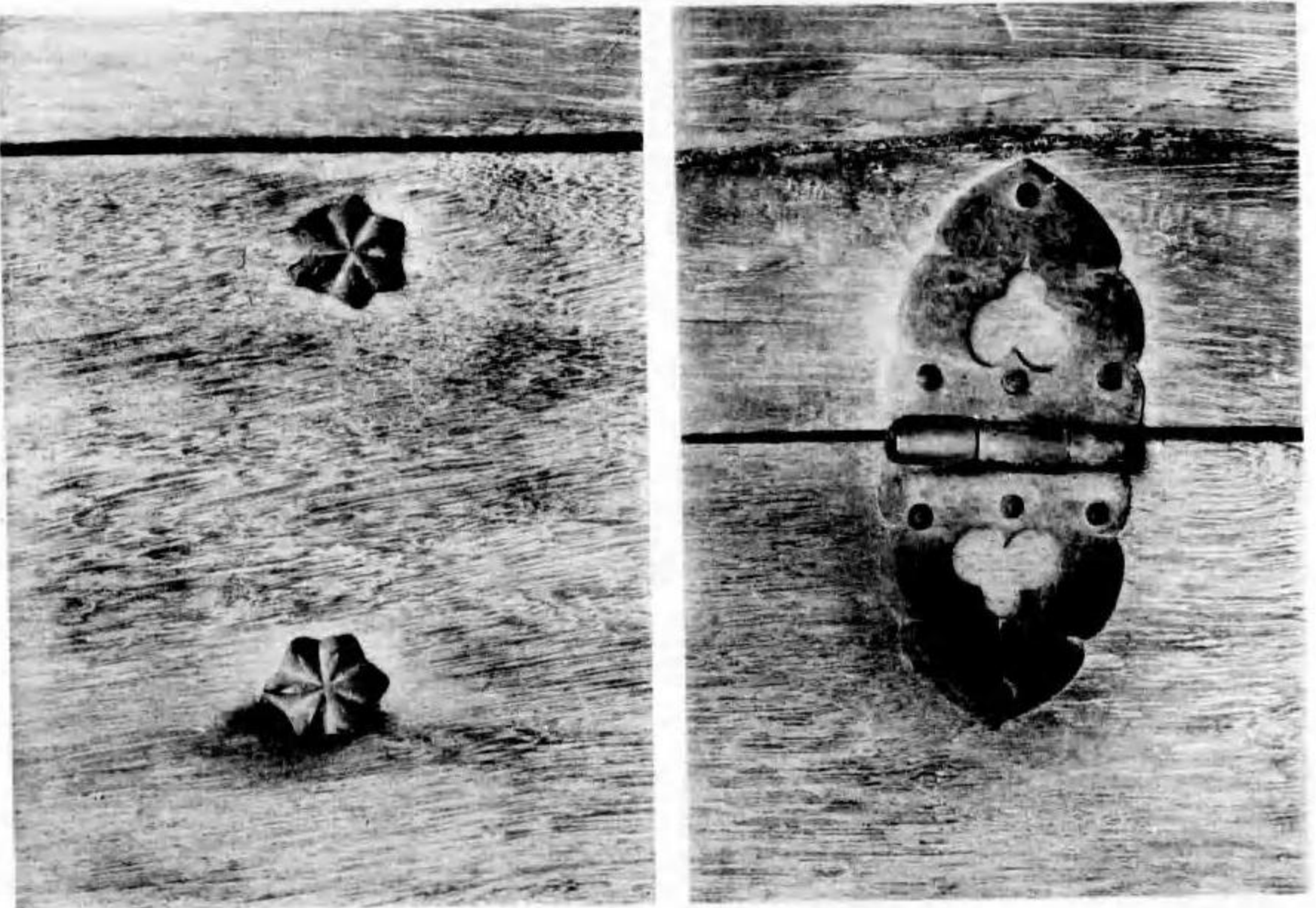
(細見分三)

第三十四圖 黒柿両面厨子(二)



此窗之構造，係用木料製成，其構造如下：
一、窗框：由木料製成，其構造如下：
二、窗扇：由木料製成，其構造如下：
三、窗棂：由木料製成，其構造如下：
四、窗台：由木料製成，其構造如下：
五、窗頂：由木料製成，其構造如下：
六、窗底：由木料製成，其構造如下：

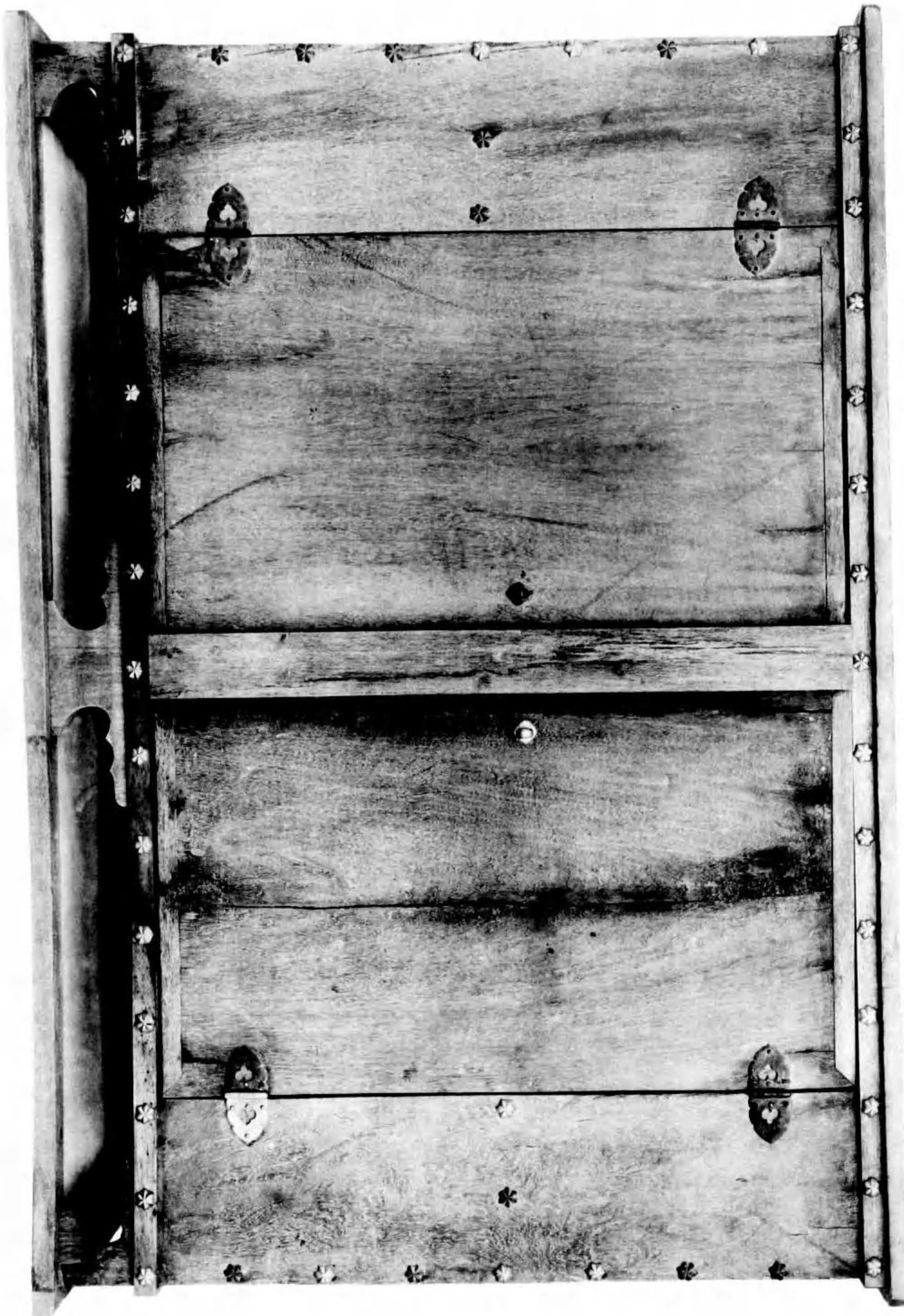
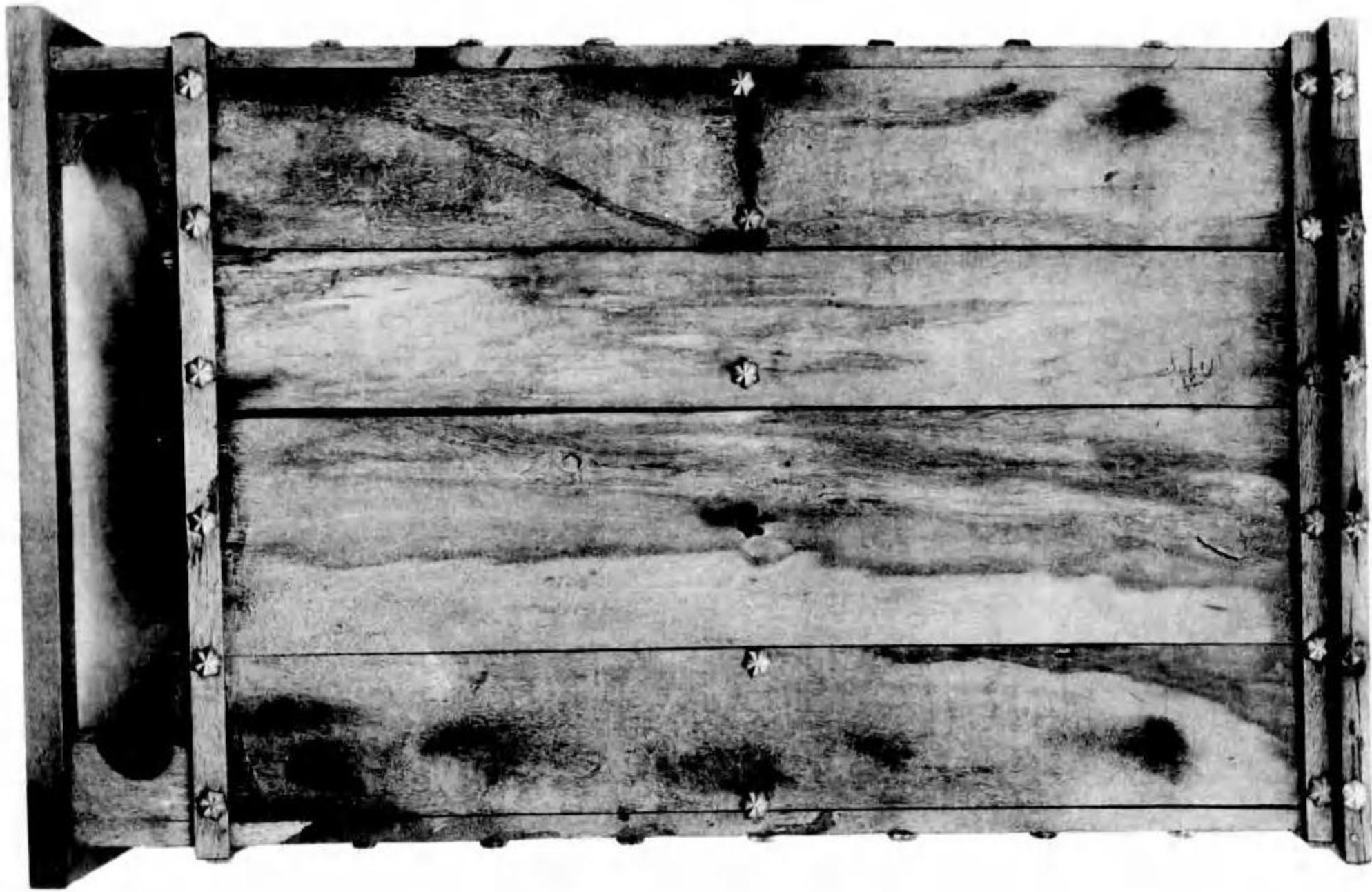
圖二十四 窗之構造



金銅金具並装飾(厨子)

材は普通の柿で黒柿に見る様な理は殆んど無い。金具は全部金銅製、就中
 蝶番金具の列形は古雅甚だ愛すべき、又花形銀の使用も本厨子にあつて特に
 多い。その正側背面を通じて貼せらるゝ数は無慮百五十三個を算え、實用よ
 す。りも裝飾的の意味のより多いのを思はせる。圖版右は正面、左は其側面を示

第二十五圖 柳 厨 子 (二)
 繪者 芳三
 高五九種五 幅八九種二 奥行三七種六



Faint, illegible text or markings, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

第二十六圖 柿 厨子 (二)

(縮寫分)

扉を開放したところを出す。

此の厨子の扉の開閉に於いて、

前掲兩面厨子又北倉文櫃木厨子

の如く貼木を用ひず、それに相

當するものを扉の一方に造り附

けてゐるのは後世の厨子の場合

と甚だよく似てゐる。然しそれ

が修理によるものか、昔からさ

うであるかは俄かに決し難い。



... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..

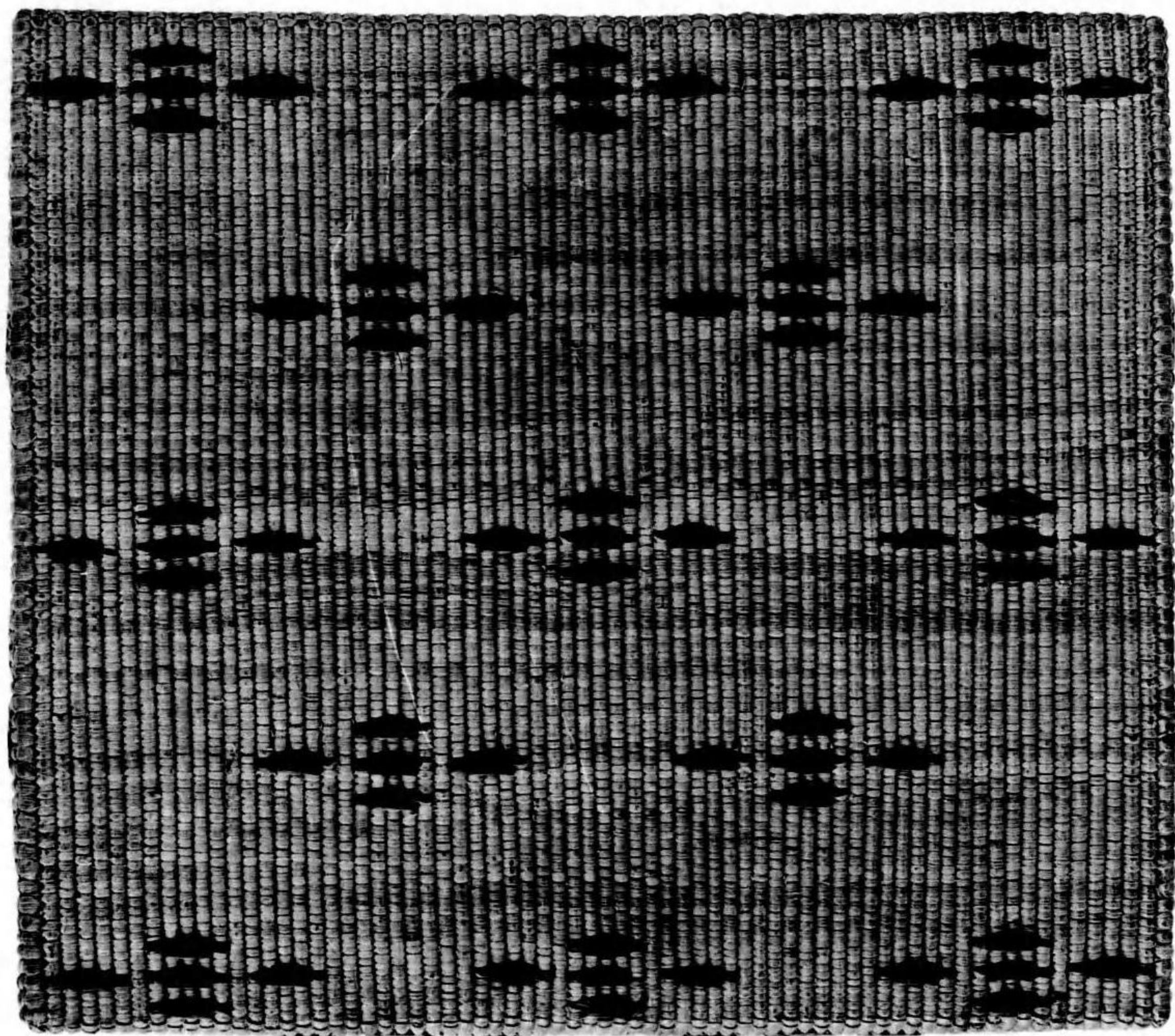
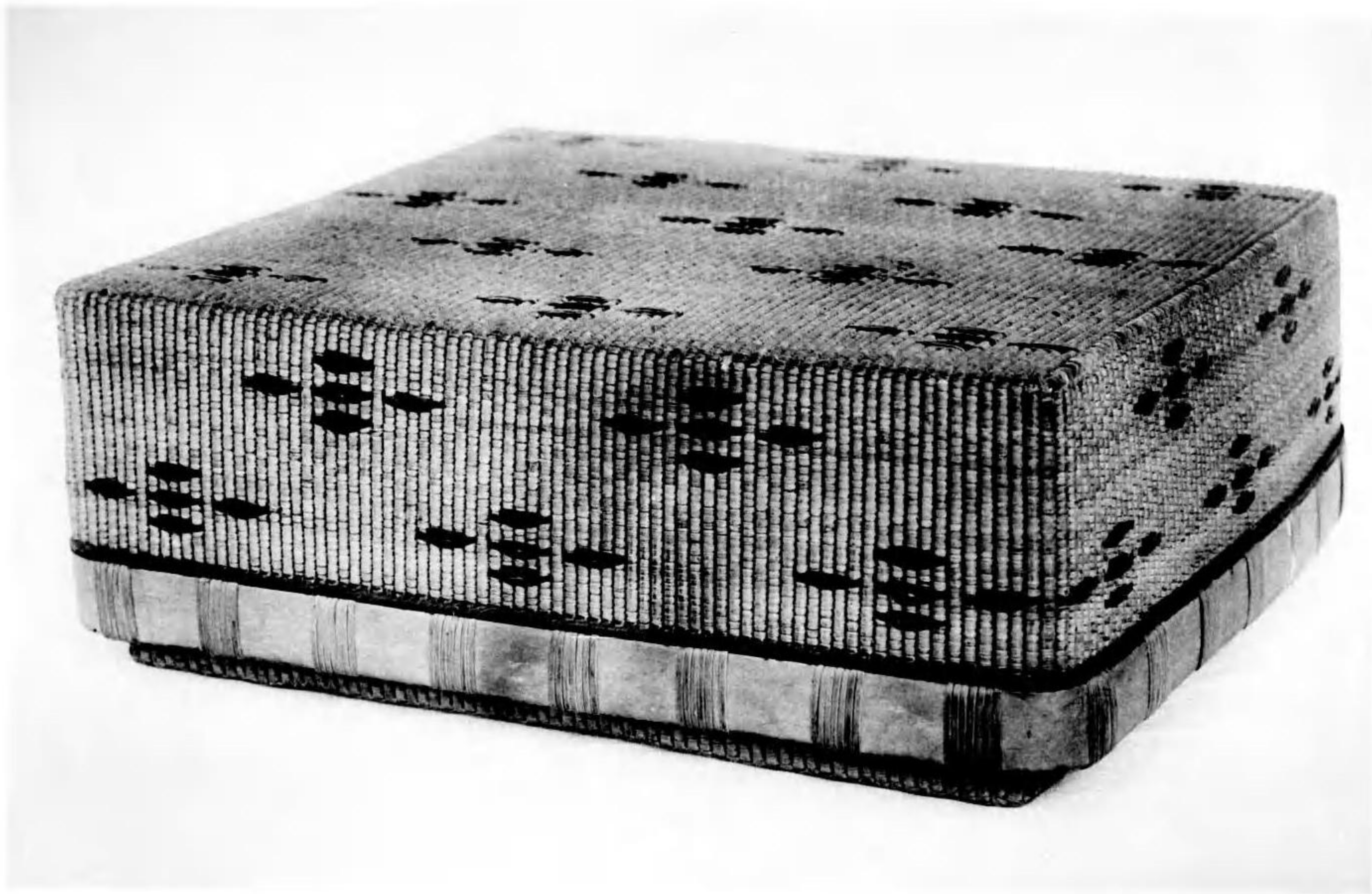
... ..

第二十七圖 白葛宮三合の一(一)

(約原寸)

蓋 竪二〇厘七 横一八厘六 高七厘一
身 竪二九厘五 横一七厘五 高七厘六

白葛を編んで造つたもので、其の表面には蘇芳染並墨染の葛で花菱形をあらはし、編み止めには白楊を纏はしめて縁を作る。上圖は其の全形、下圖は色彩の殊に鮮明な底裏を示す。



第十圖 古白紙の組合せ

一、古白紙の組合せ
 二、古白紙の組合せ
 三、古白紙の組合せ
 四、古白紙の組合せ
 五、古白紙の組合せ
 六、古白紙の組合せ
 七、古白紙の組合せ
 八、古白紙の組合せ
 九、古白紙の組合せ
 十、古白紙の組合せ

第二十八圖 白葛篋三合の一(二)

(上縮四分三、下原寸)

葛篋の内には白麻紙を心とし淡紅色紙を表にした
襷たぶを入れてゐる。上圖は蓋を開いて其の襷の一部を
覗かしむ。

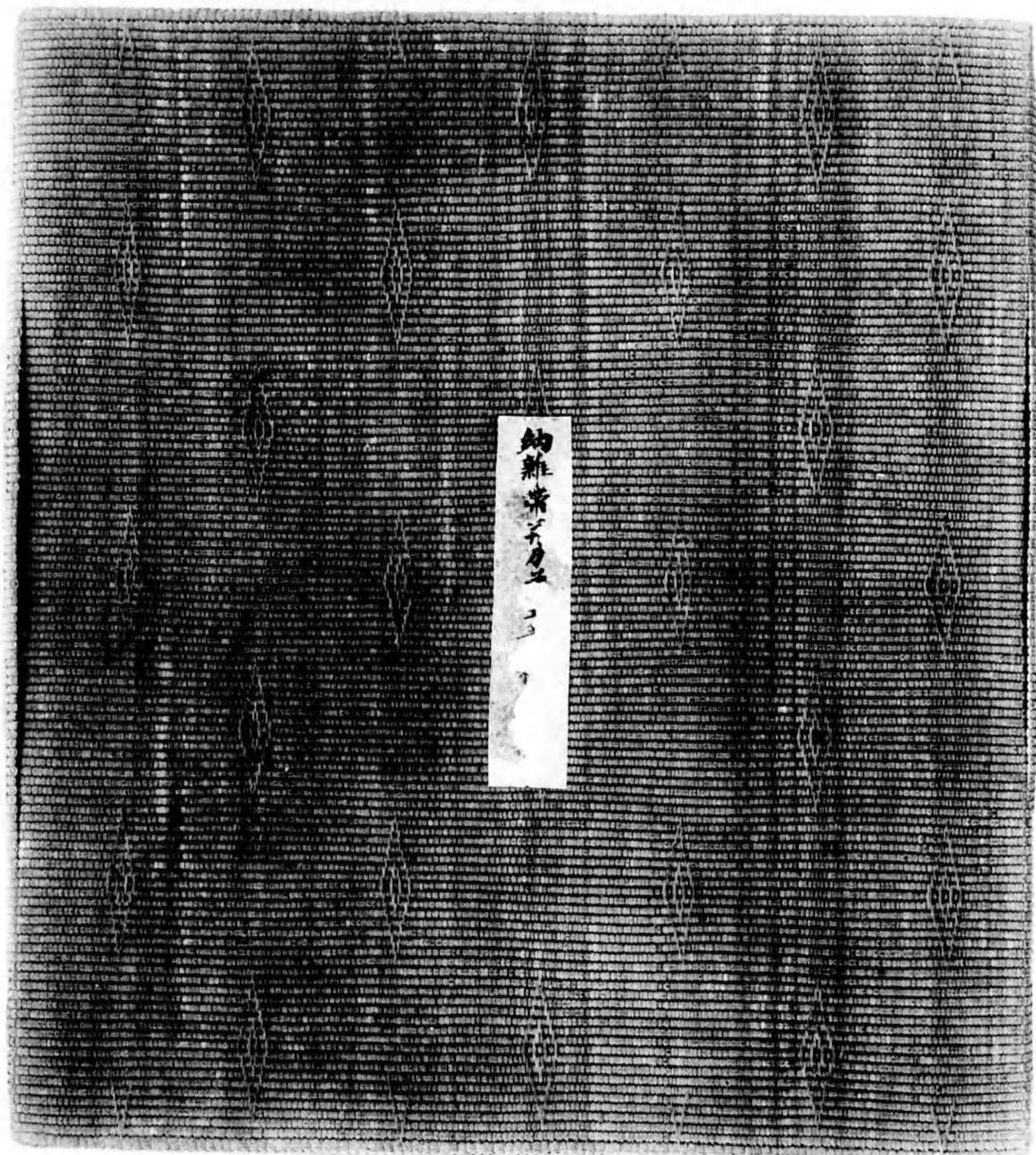
下圖は當代葛篋の技法を見るべく特に蓋裏を原寸
であらはした。表面に花菱形の文様の編み出されて
ゐるに拘らず、裏面が一樣の平編みである事は、織
物の場合とよほど異つてゐる。

第二十九圖 白葛宮三合の二

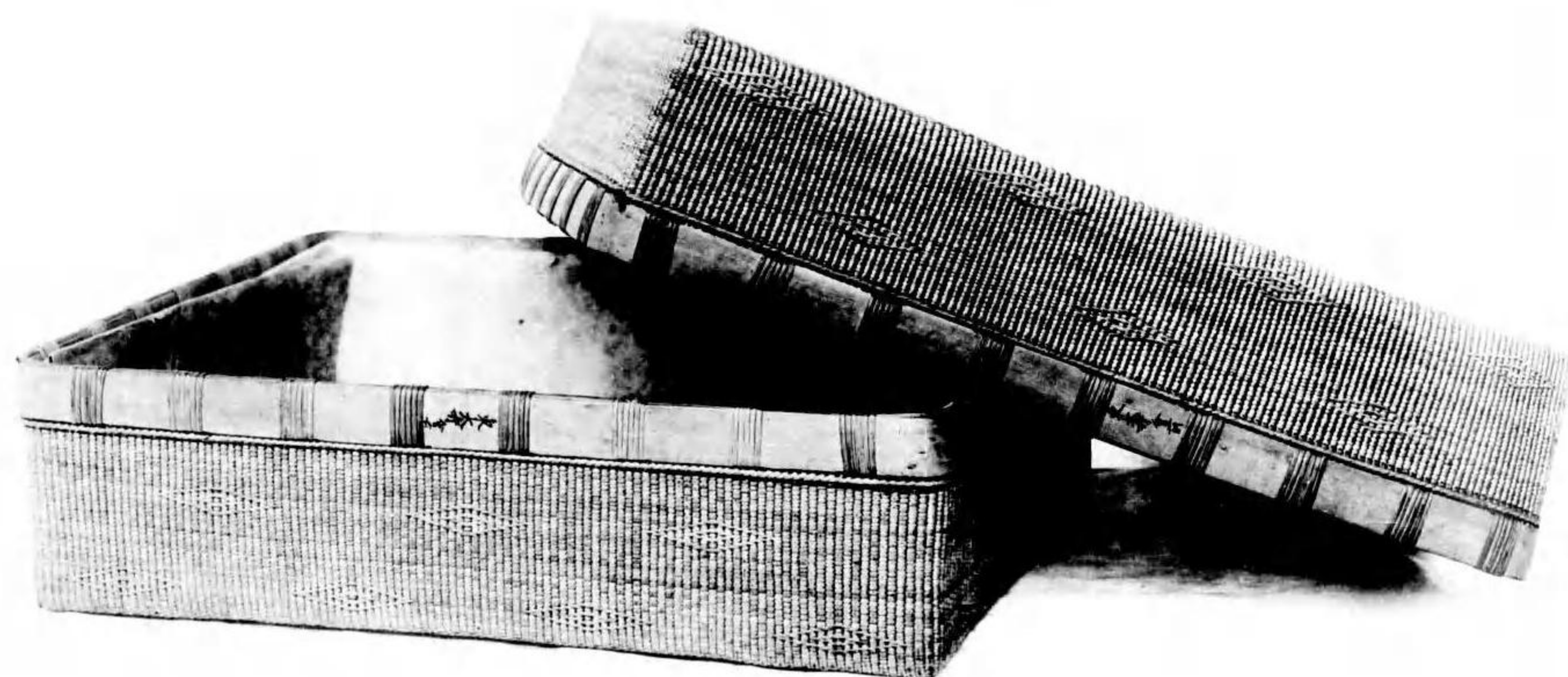
(上幅五分ノ三、下約三分ノ二)

蓋 堅三六種 横三二種 高八種五
身 堅三四種五 横三〇種五 高九種五

製作技法は前掲白葛宮と全く同じである。只彼の色染葛を以つて表面の文様を作るかほりに、これは同色葛で文様を浮かせて居り、前者の文様の花菱であるに對し、これは二重菱をあらはしてゐる。宮内には白麻紙を心とする紫褐色の囀があり、又蓋表には「納雜帶并刀子□」の貼紙、蓋及身の楊縁には各「東大寺會前」の墨書がある。



鈎
雜
業
本
巻
二
丁
三

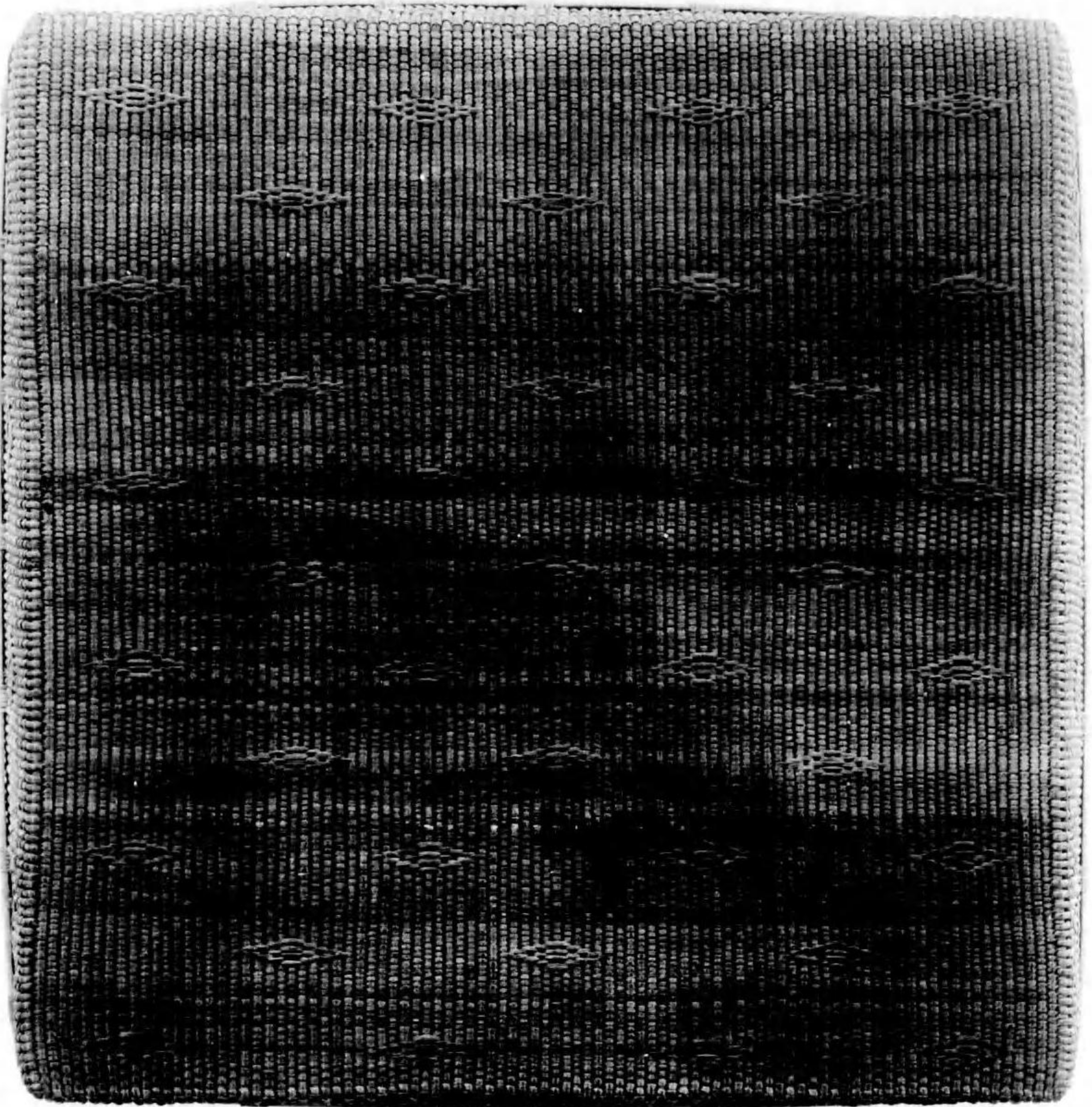


第三十圖 白葛篋三合の三

(上幅三分二、下幅二分一)

蓋 堅三四種二 幅三五種七 高五種
身 堅三三種 幅三四種五 高五種三

表面の菱形文様が多少變化してゐるだけで、構造
編方は前二者と全く同じである。これには紙の覗は
無く、蓋及身の楊線にそれ／＼「東大寺花篋」の墨
書が残る。



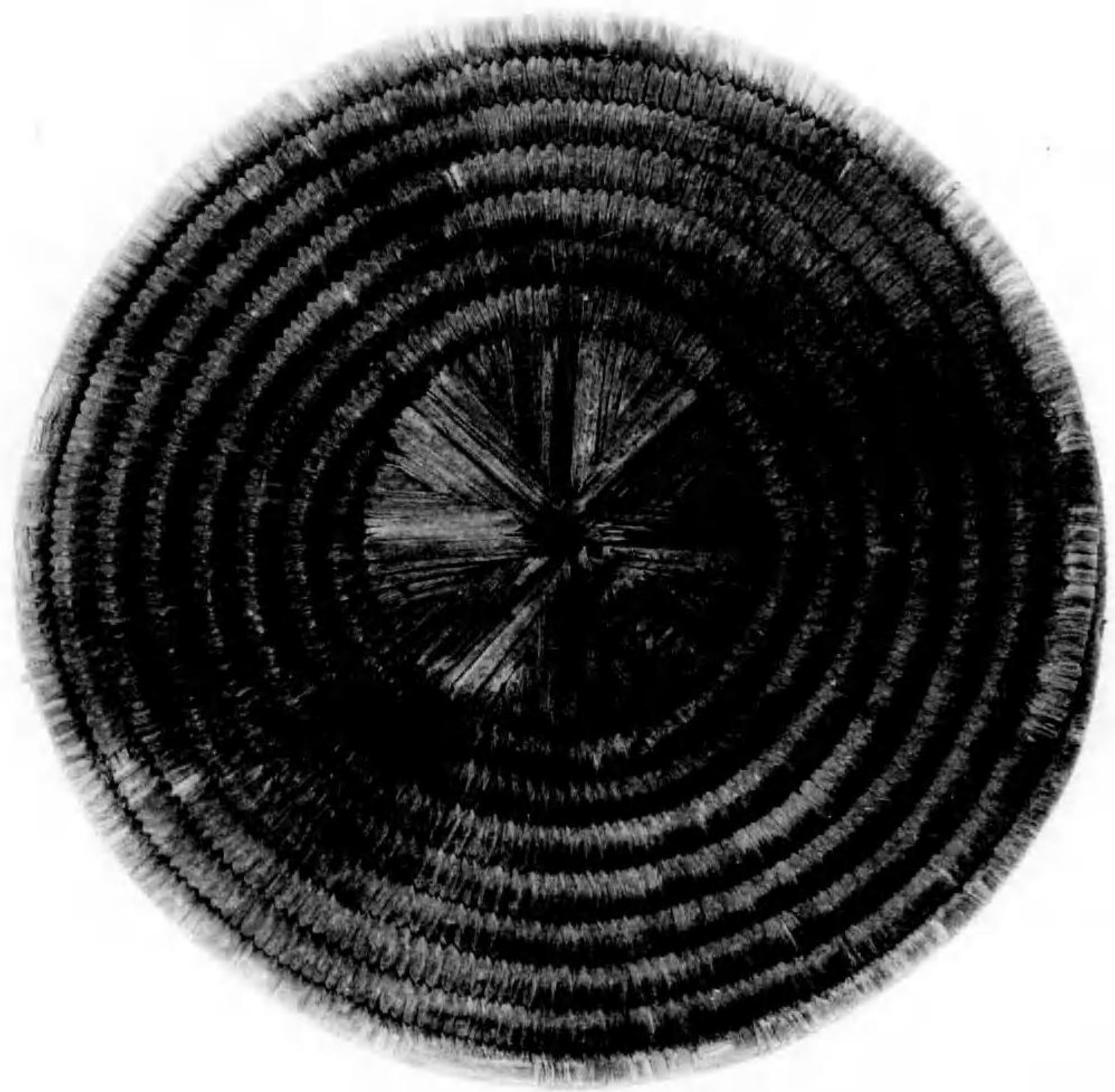
Handwritten text in Chinese characters, likely a title or description of the books. The text is faint and difficult to read, but appears to be arranged in several lines.

第三十一圖 斑 蘭 筥 蓋 (二)

徑一七種二 高二種九

(原 寸)

丸蘭を束ねて心となし、之を渦旋狀に導きつゝ、中央より次第に編み進めたもので、其の編み方は今の飯櫃盒の製作と甚だよく似てゐる。編蘭には白蘭蘇芳染蘭、黄染蘭とを混ぜ用ひ、放射形の文様を作つてゐるが、外氣に對する面は退色甚しい。圖上は其の上、下は側面。



第三圖 草蓆

此蓆係用草編成，其法係將草束成條，然後編成圓形，其中心有一束草，向外放射，形成一種星形圖案。此蓆多用於鋪地，或作為坐墊。

第三十二圖 斑 蘭 筥 蓋 (一)

(原 寸)

蓋裏を示す。蓋裏には斑蘭の色彩尙ほ鮮に残り、圖中比較的黒く見えるは蘇芳染斑、最も明るく見えるは白蘭其の中間色に見えるは黄染斑の部分である。

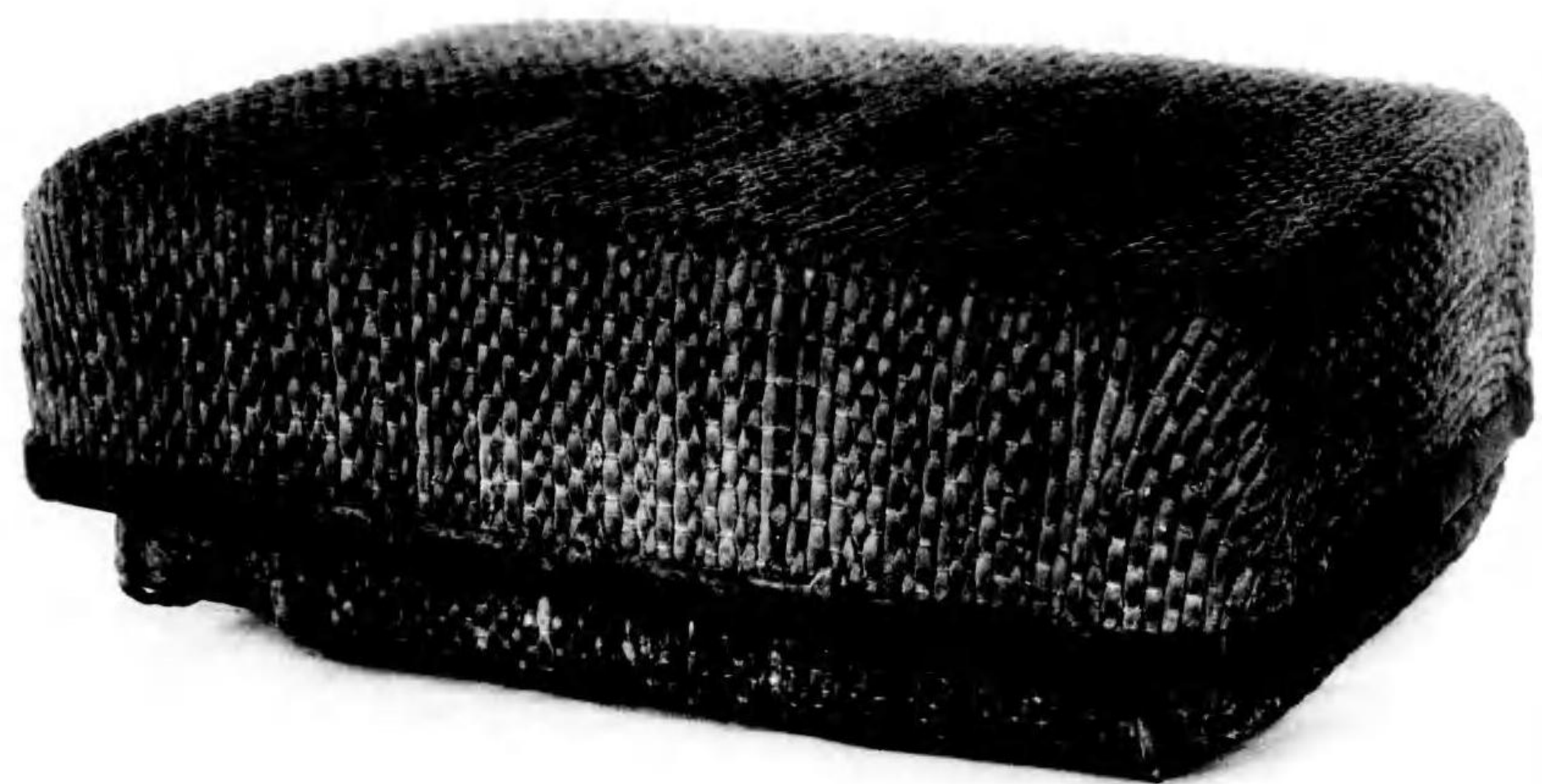
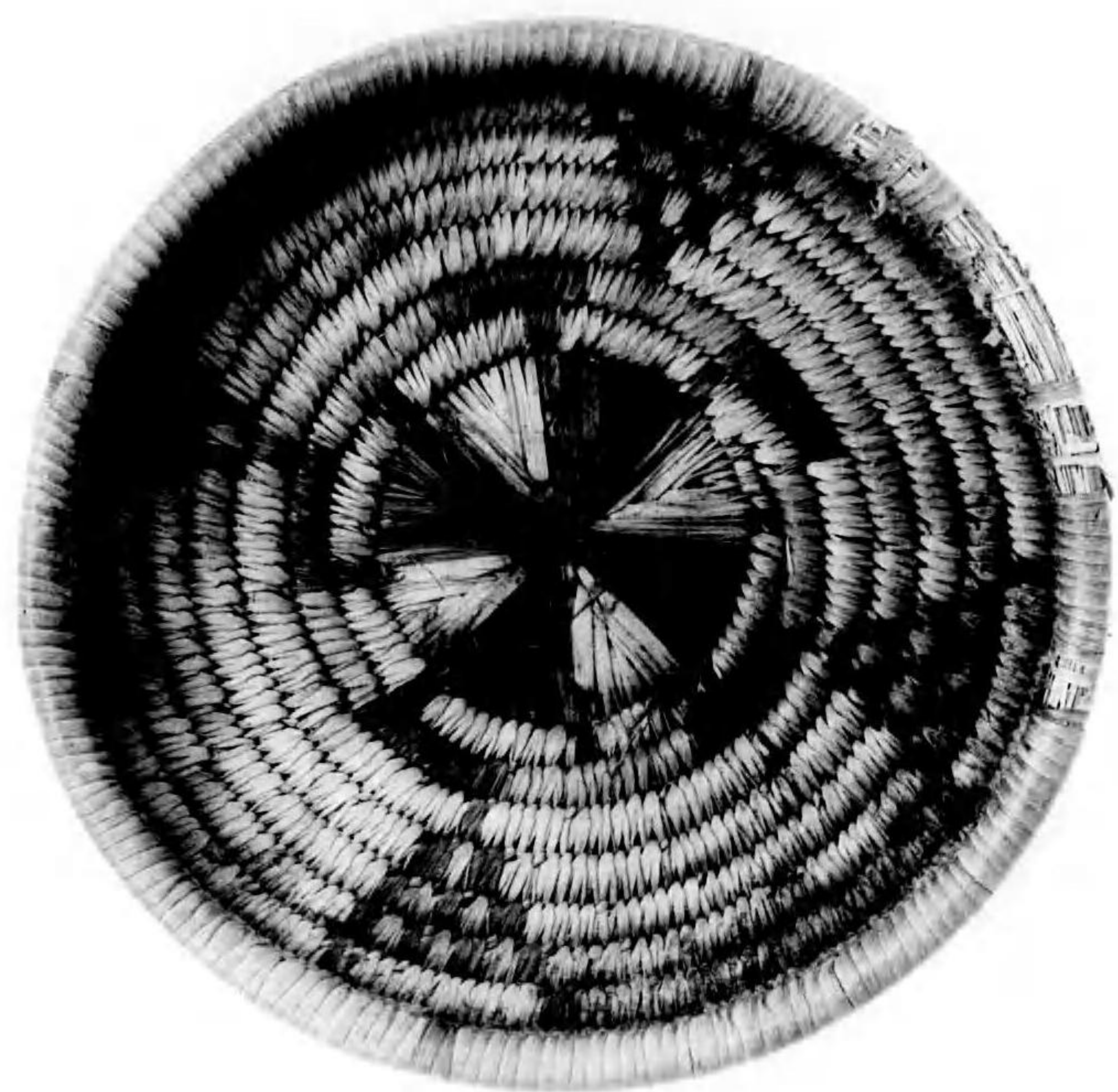
因にこの斑蘭筥は蓋のみ現存して身は失はれてゐる。

柳 箱 (一) (約 原 寸)

蓋 縦二〇厘三 横二四厘 高五厘二

身 縦一九厘 横二三厘五 高六厘七

編み方は今の柳行李と同様で、皮を去つた細楊を平行に並び、麻糸を經として編んだもので、その編み留めには、楊の枝を纏ひ楊皮で結つて縁となして黒漆を塗つてゐる。



Handwritten text, likely a description or inventory list, located on the right page of the notebook. The text is faint and difficult to read.

第三十三圖 柳

箱(二)

(縮寫五分四)

前掲柳箱の蓋と身との表裡を示す。身蓋とも其の内面に柳を網代に組んだものを入れて二重となし、今の柳行李の製作よりも更に入念の仕事がしてある。内面の網代の組方を蓋と身と異にしてあるのも面白い。

尙此箱には何故か其の内外にわたつて銀粉が多く附着してゐる。

第三十四圖 漆皮箱二合の一(上)

蓋 竪四三種五 横三四種 高九種二
身 竪四二種 横三二種七 高九種七

長方形の箱で、蓋身とも僅かに面を取る。

其の製作は牛皮を心とし縁に栲布を貼し全面黒漆塗したものらしい。蓋表には白紙を貼り墨書して「寺入」とある。

(縮寫七分ノ三)



(寸 原)

漆皮箱二合の二(下)

蓋 竪三二種八 横三二種五 高四種三
身 竪三二種 横二二種五 高四種五

(縮寫三分ノ二)

ほぼ正方形をなし、蓋身とも僅かに面を取る。製作は大體前者に同じ。



第三十四圖 彩文漆二合の二

都賀より一合の二合の
 黒漆箱一合の二合の
 其の蓋に白漆の二合の
 其の蓋に白漆の二合の
 其の蓋に白漆の二合の

白漆箱一合の二合の
 黒漆箱一合の二合の
 其の蓋に白漆の二合の
 其の蓋に白漆の二合の
 其の蓋に白漆の二合の

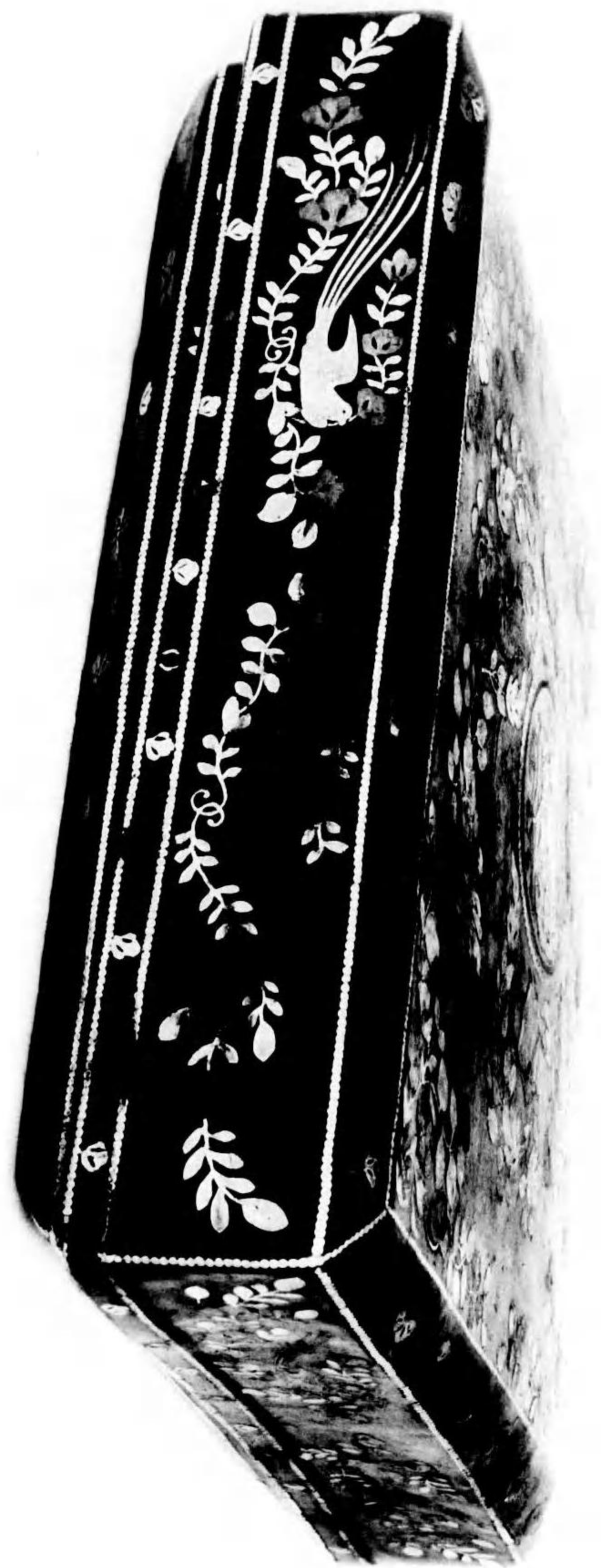


第三十五圖 金銀平脱漆皮箱二合の(一)

(圖約五分四)

蓋 堅二七種 横三種 高六種三
身 堅二五種 横二種五 高七種五

漆皮箱の蓋表並側面と身の側面に涉つて、金銀平脱で種々の文様をあらはしたもので、北倉銀平脱の漆胡瓶と共に平脱應用の代表的遺品である。箱は長方形をなして蓋身ともに面を取り、棧に随つて連珠形の界線を作り、界内に金銀の文様を配し、内部には厚麻紙の心に檢紙を披せた囷を入れる。



THE
LIBRARY OF THE
MUSEUM OF
COMPARATIVE ZOOLOGY
AND ANATOMY
HARVARD UNIVERSITY
CAMBRIDGE, MASSACHUSETTS
U.S.A.

第三十六圖 金銀平脱漆皮箱二合の一二

(縮寫五分四)

前掲金銀平脱漆皮箱の蓋表を

示す。中央に飛翔する鳳凰は金

其周囲の連珠圈と飛雲とは銀、

同じく連珠の外圈は金、之を繞

ぐる六雙の遊禽は銀、鳥の脚へ

る花枝は金、花は銀、取面の界を

なす連珠線は金、界内の花文は

上欄を金にし下欄を銀にするも

のと、上欄を銀にし下欄を金に

するものとを交互に配してゐる。

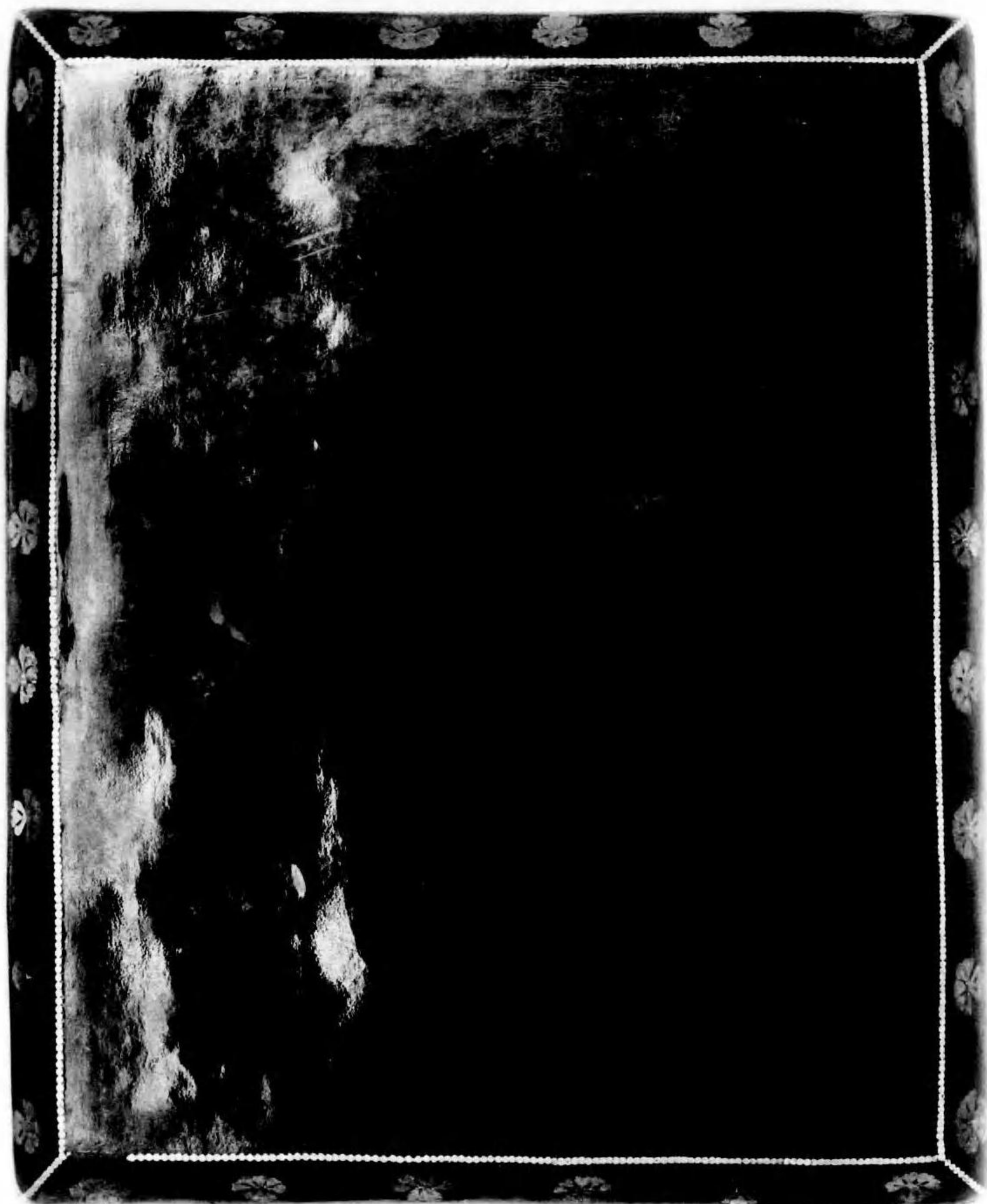
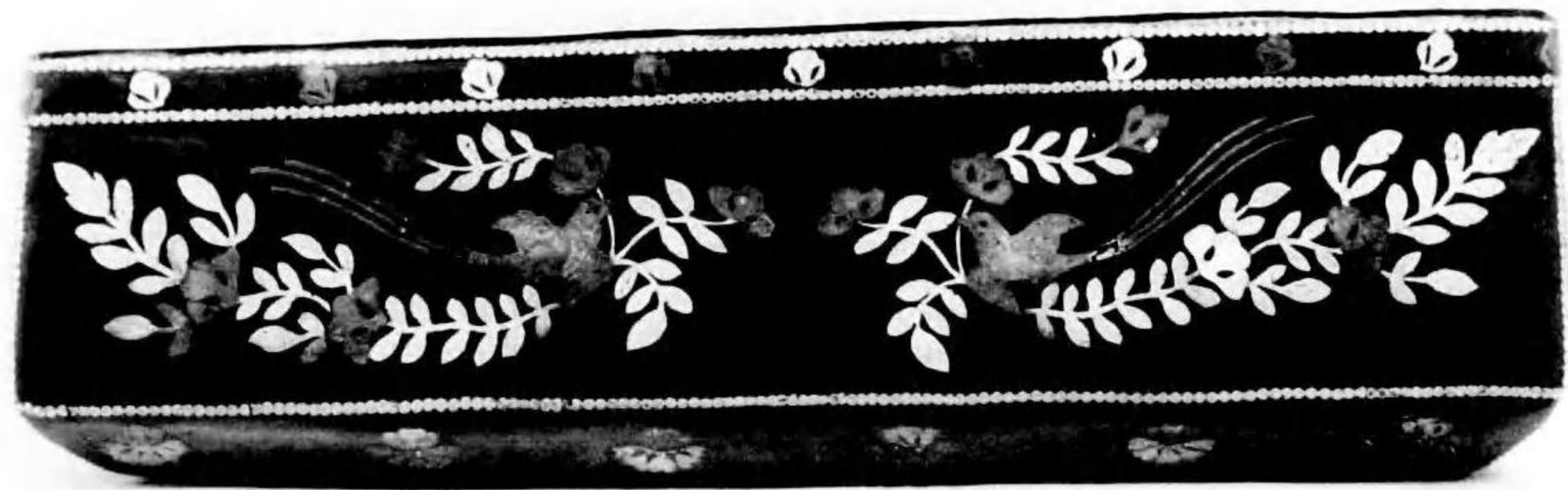


Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

第三十七圖 金銀平脱漆皮箱二合の一(三)

(縮寫五分ノ四)

身の側面と底裏とを出す。側面に表はされた尾長
鳥と花は銀、花枝は金、又上部界線内に配された木
葉形は金と銀とが交互に置かれてゐる。下部取面に
ある花形は蓋の取面中のものと同様である。



THE
LIBRARY
OF THE
MUSEUM
OF
COMPARATIVE ZOOLOGY
AND ANATOMY
HARVARD UNIVERSITY
CAMBRIDGE, MASS.

第三十八圖 金銀平脱漆皮箱二合の二(一)

（縮寫約五分ノ三）

蓋 竪二七種 横三種 高六種三

身 竪五種 横三種 高七種五

大々文様製作手法等前者と殆

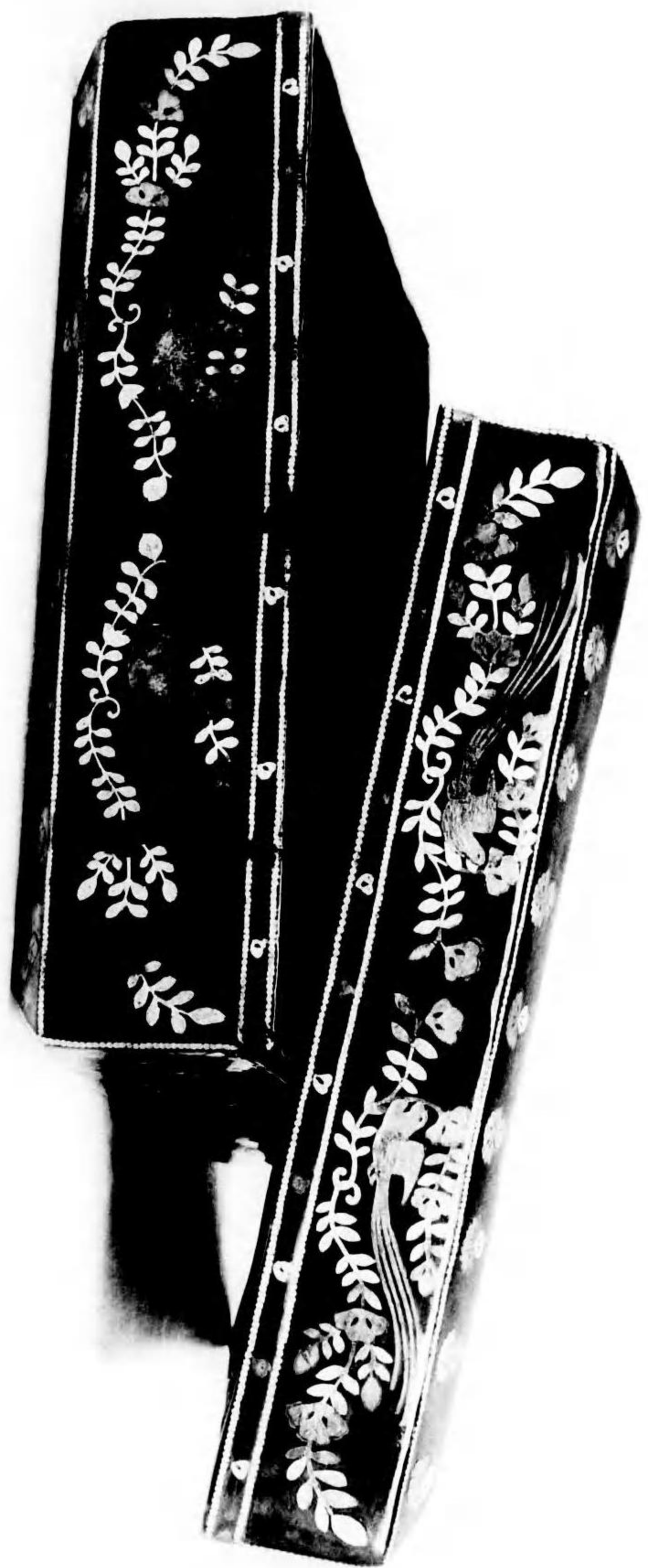
んど同じだが、蓋並身の口縁、

界線内に配された文様には兩者

に截然たる區別が見られる。

箱の内部には前者と同様白襦

麻紙の囀が残る。



清 明 節 祭 祖 矣
維 皇 朝 萬 歲 山 宗 室 萬 歲 萬 歲
十 萬 歲 萬 歲 萬 歲 萬 歲 萬 歲
恭 祝 皇 朝 萬 歲 萬 歲 萬 歲 萬 歲
小 子 明 子 謹 啟
大 清 文 宗 顯 皇帝 聖 訓 萬 歲 萬 歲
平 定 縣 縣 志 卷 之 五
五 十 五 年 歲 次 庚 子 仲 夏 月 日

卷三十八 雜錄

第三十九圖 金銀平脱漆皮箱二合の二(二) (原 寸)

蓋表と蓋側面との文様の一部を原寸大に出す。鳥の羽毛、花の繊維、葉脈等をそれ／＼細かに毛彫してゐる。



第三章 圖 金銀手抄書

一、金銀手抄書の概観
二、金銀手抄書の歴史

第四十圖 密陀繪漆皮箱(二)

(上約原寸、下縮寫十分ノ九)

蓋 一 邊長二二種六 高四種一
身 一 邊長二二種九 高四種二

正方形被蓋の箱で蓋身ともに面を取る。蓋の一部破損せる箇所に就いて觀察するに、皮の上に更に二重の麻布を被せて黒漆を塗り、之に赤密陀もて文様を描いたもの、様である。箱の内には覗がある。覗は紫紙を心として縁に細き竹を入れ底に綿を敷いて、之を繩で包んだものであるが、朽損甚だし。

圖版の上は側面、下は蓋をとつて覗を見せる。



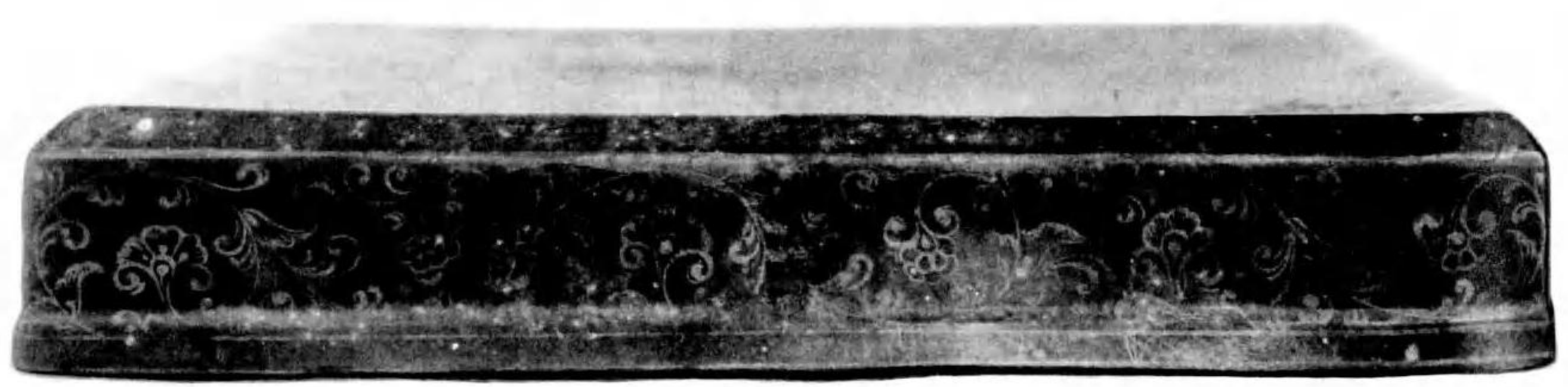
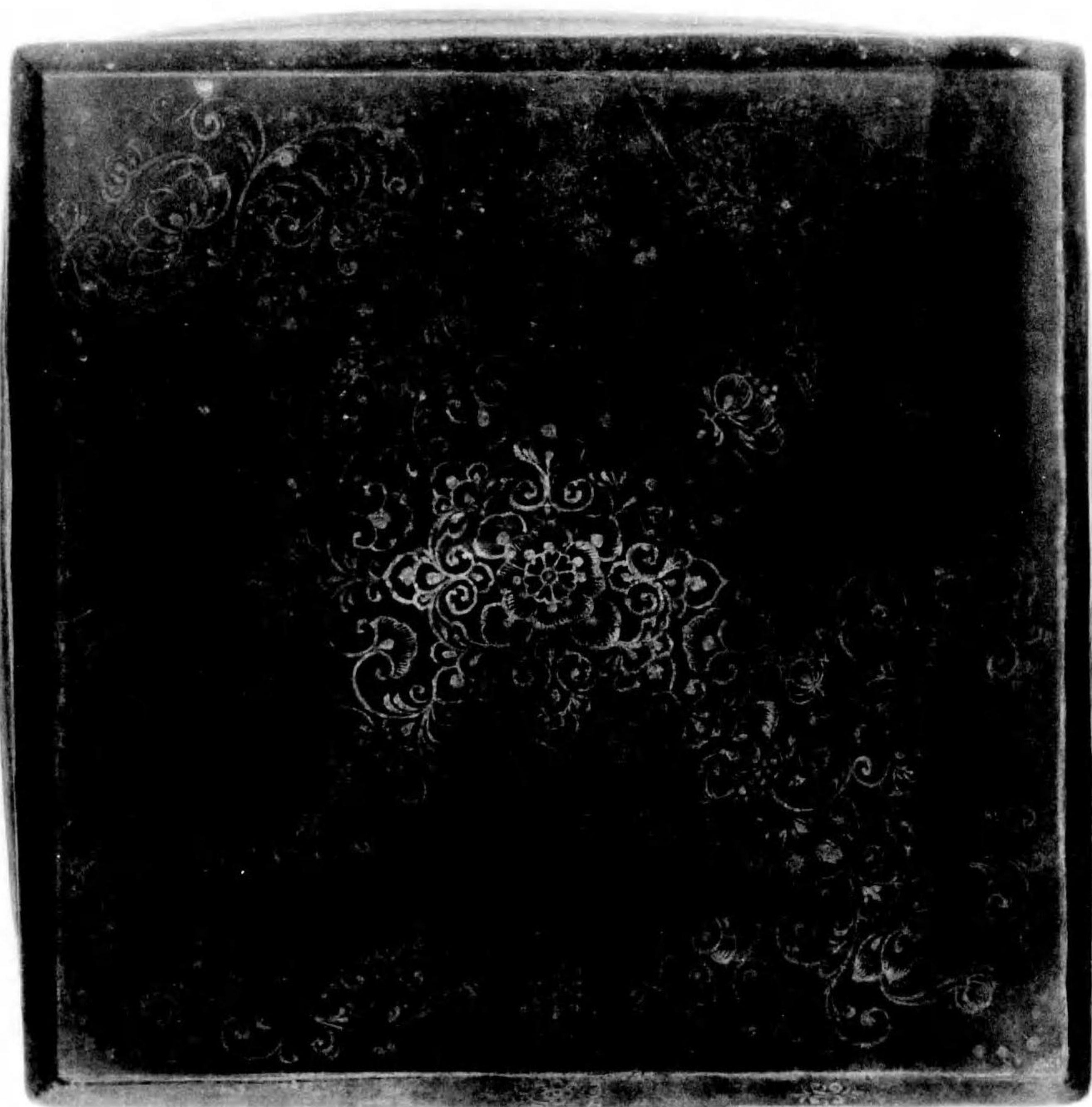
第四十圖 寶印齋書畫匣一

寶印齋書畫匣一、此匣之形制、與前圖無異、惟其蓋面、繪有山水、人物、花卉、等圖、其畫法、極其精細、且其匣內、設有小匣、以貯書畫、其匣之大小、均與匣蓋相稱、其匣之裝飾、亦極其華麗、此匣之價值、實非他匣所能及也。

第四十一圖 密陀繪漆皮箱(二)

（原）す

蓋表と其の側面とを示す。蓋表には赤密陀で大窠文を描き、取面には同じく忍冬唐草の飛文を、側面には扁行する唐草文を表はす。然し是等の文様は赤密陀が焼けて銀色を呈するところが寧ろ多い。圖版中文様の白く鮮かに出てゐるのは、銀色に變化した部分である。



第十四回

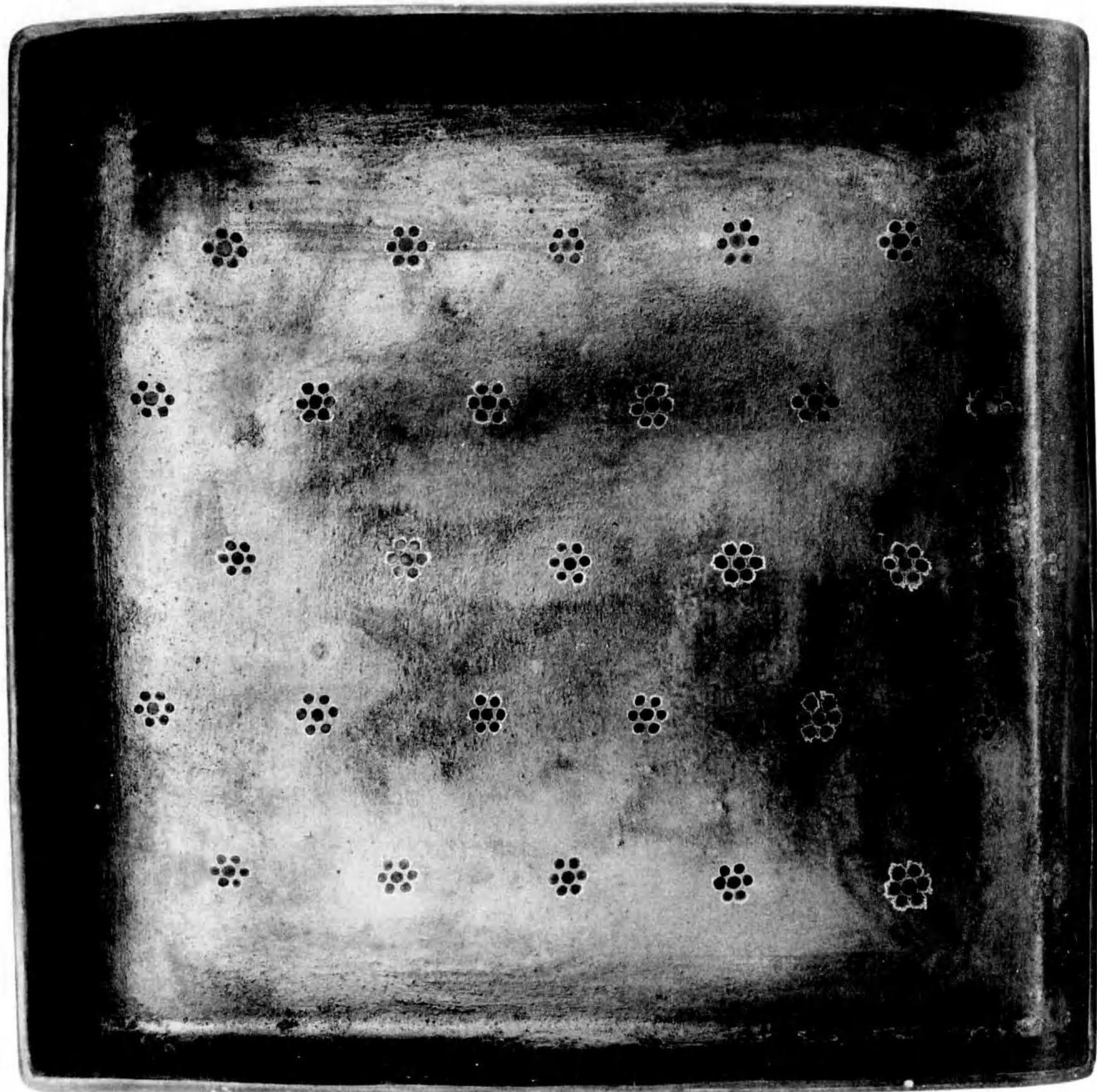
...

第四十二圖 密陀繪漆皮箱(三)

(原寸)

上圖は身の内面を示し、下圖は其の側面を表はす。外面の黒漆塗りであるに似ず内面は全部赤密陀で塗られ、その上に銀で七曜形の小花文が散らされてある。花文の銀は多く黒色に變じてゐるが、其の周圍には尙白銀の結晶が見られる。かく赤密陀塗りの上に銀の花文を散らす事は蓋の内面も同様である。

身側面には蓋と同様同種の唐草を描く。而して此の唐草に於いて直角に隣る二邊の唐草が互に方向を異にしてゐるは、稍注目に値する。尙此の箱にあつては、身の底にも蓋表と同様の大窠文を作つてゐる。而もそれは直接外氣に觸れぬ爲か文様殊に鮮かである。



第四十三圖 沈香水畫水精莊箱(一)
飾 圖 寸

堅三種 横二種 高八種 八五

數ある獻物箱の中最も善美なもの
ものと云へやう。全面沈香と紫檀
檀とで張り、沈香張りの上には
更に金泥で諸種の文様を作り、
又所々に水精板を嵌して其の下
に彫繪を伏せ、棧と縁とは緞密
な木畫を嵌め、床脚には象牙
で莖草の漏空彫を施す。且つ内
面黒柿葉芳染の板にも金泥で木
理を描く等、最も裝飾に意を用
ひてゐる。



Faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

前掲沈香木漆箱の兩側面と背面とを
出す。水精板嵌込みの彫繪は、兩側面
に於いて紫地に花卉胡蝶の圖、正背面
に於いては、中央は赤地に花卉双鳥の
圖、兩端は綠地に山岳双鹿の圖を作る。
然し是等を熟視するに、其の圖様に於
いても色調に於いても、そこには常に
劃一で無い均正がある。それは沈香張
に施されてある金泥の山水文様に於い
ても同様に云へる。

次に床脚に施された象牙雕空彫を見
るに、其の葡萄唐草文には獅子があり
鳥があつて所謂怪獸葡萄鏡の外區文様
に共通する點の多いのに氣づく。

圖 一

第四十四圖 沈香木漆水精莊箱(一)

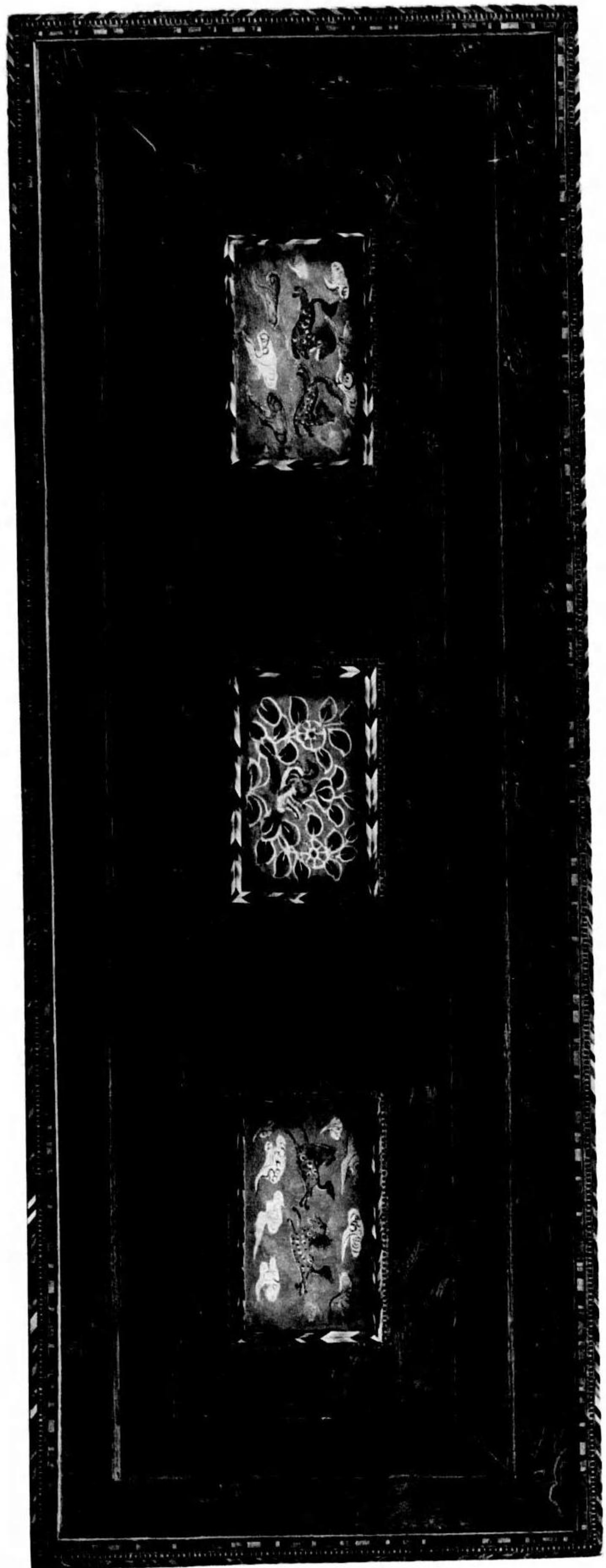


Faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

箱の蓋表を現はす。中央三個の水精板旅めを繞つて金泥で木理が描かれてあるは沈香張りの部分、其の周に紫褐色の帯状をなすは紫檀張りの部分、更に其の外區をなして金泥の木理を作るは又沈香張りの部分、而して其の周縁と水精板の縁に矢羽根形をなすは木蓋の箇所である。

図 三

第四十五圖 沈香木蓋水精葺箱(三)



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

第四十六圖 密陀彩繪箱三合の一(一) (上箱寛五分三、下約二分)

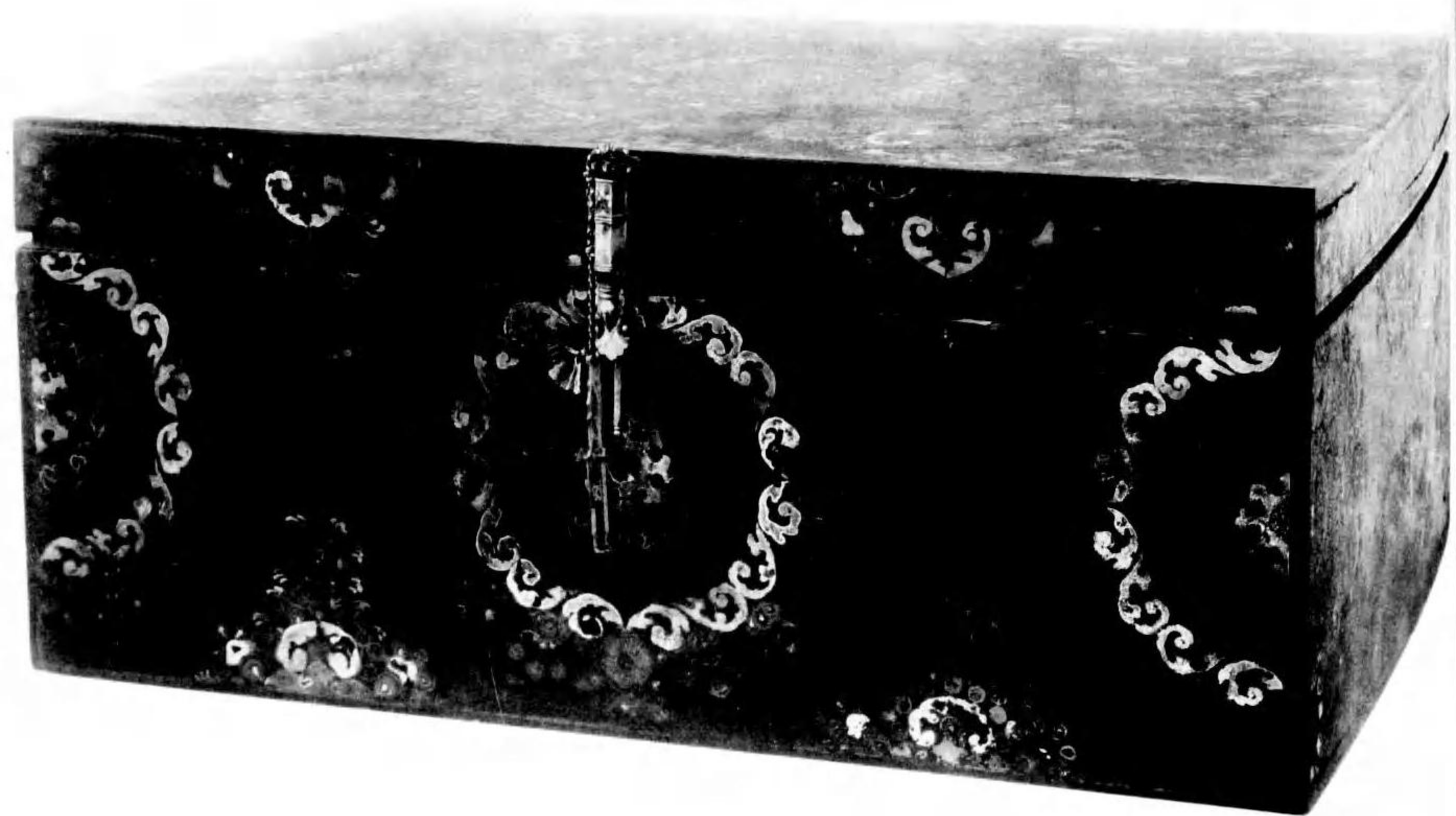
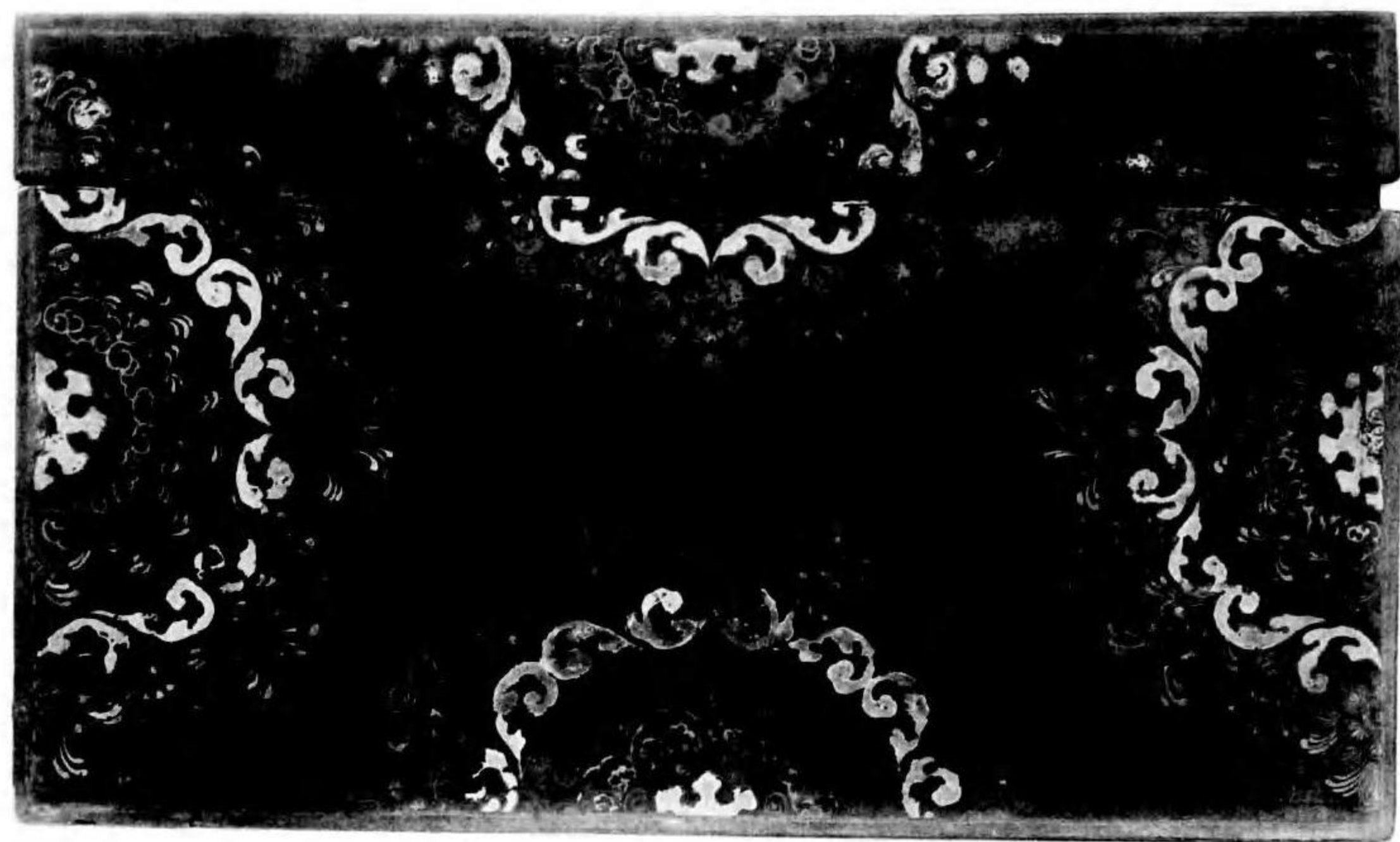
堅四三裡八 横三三裡 總高一九裡

木製黒漆塗印籠蓋の箱で、正面には金銅の海老錠をつけ、背面には一双の金銅肘金具と壺金具とを設けて開閉の便に備へてゐる。密陀彩畫はこれが上兩側・正背の五面に涉つて施され、二種の窠文を交錯して描く。

圖版上は箱の側面、下は斜面を示す。



(寸原) 子 鐘 銅 金



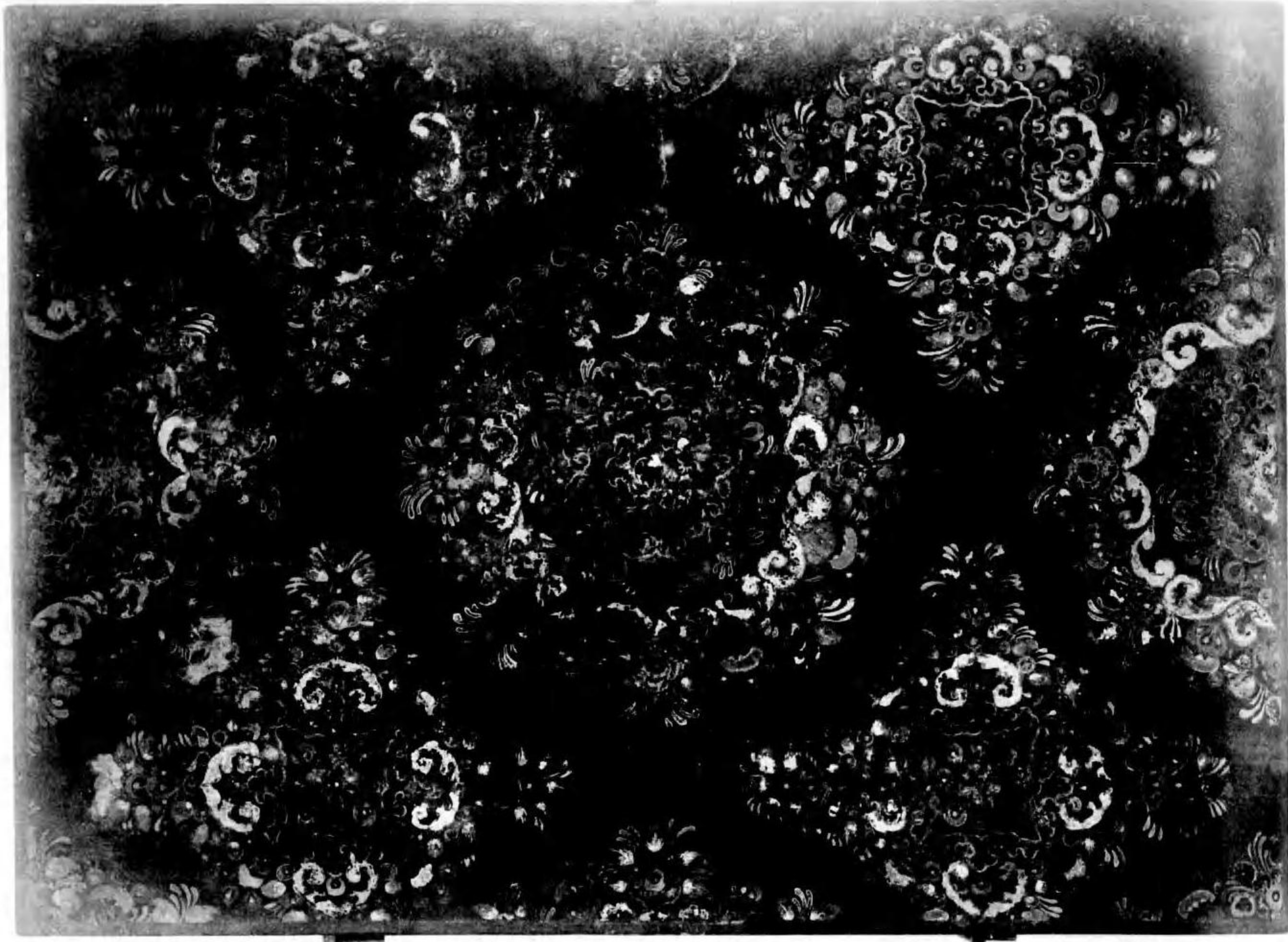
Handwritten text in a script, possibly Arabic or Persian, located on the right page of the book. The text is faint and difficult to read, but appears to be a list or a set of instructions.



第四十七圖 密陀彩繪箱三合の一(二)

(縮寫五分三)

前掲密陀彩繪箱の上面と背面とを出す。圓形窠文と菱形窠文とを交錯配置した錦織によく見る圖柄で色彩には赤・黃・綠・茶並金箔とが案配されてゐる。



Faint, illegible text or markings, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

Faint, illegible text or markings, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

第四十八圖 密陀彩繪箱三合の二(一)

(縮寫五分ノ三)

堅四五種 横三〇種 總高二一種四

木製黒漆塗印籠蓋の箱で、蓋は僅かに面を取り、其の表には白と赤との密陀で、廻旋する忍冬文と靈鳥とを描く。蓋表中央に貼紙して「納丁香青木香會前東大寺」とあるは、以つて此の器が天平の當時香箱として使用された事を察せしめる。箱の内部が縦の界により二區に劃せられ、それ々に白麴の覗を存するは丁香と青木香とが、その中に分納されてゐたものと思はれる。



箱内面